

聞き書きによる被爆体験証言集28
■被爆体験証言集朗読シナリオ

つたえてください
あしたへ……

エフコープ生活協同組合 編

聞き書きによる被爆体験証言集28
■被爆体験証言集朗読シナリオ

つたえてください
あしたへ……

 FCO-OP

表紙写真 旧城山国民学校校舎

1984年(昭和59年)に現在の校舎が増築される際、慰霊会や育友会の働きかけにより丸窓が特徴的な階段棟が保存された。1999年(平成11年)2月児童の発案と慰霊会により「城山小学校平和祈念館」として開館。校舎内には当時の状況を伝える資料などが展示されている。

広島・長崎への原爆投下、そして、終戦から七十八年。
被爆者の高齢化が進み、

戦争や原爆が遠い過去のこととして、記憶の風化が進みつつあります。

核兵器禁止条約への署名・批准をする国々が増える一方で、
核軍縮に反する動きもあります。

二〇二三年五月十九日から二十一日まで、

被爆地・広島で開催されたG7サミットにおいて、

「核軍縮に関するG7首脳広島ビジョン」が発出されました。

戦争を、そして原爆の悲惨さを知らない私たちにできること。

核兵器のない世界を実現するために、

署名活動や学習会などのとりくみを通して、

核兵器廃絶に向けた発信をし続けていきます。

「二度とヒバクシャを出さないために」

世界唯一の被爆国である日本に住む私たちが、

被爆者の声を真摯に受け止め、

いまだに
よなものが
面に浮いていました
く
いたまを飲みました
る少女の手記から

戦争や原爆がもたらした悲惨な実相から

目をそむけないようにしましよ。

そして、かけがえのない命の大切さを、

次世代につたえ継いでいきましよう。

できることは微力でも、無力ではありません。

ひとりひとりの平和への思いは、

きつと大きな力になると信じています。

若い世代に被爆の悲惨さ、戦争の恐かさを語り継ぎたいとの

組合員の強い思いで作られた

「つたえてください あしたへ……」を継承し、

これからも平和への思いを発信します。

平和を願う思いが、

ひとりでも多くの方に届き、

平和の輪が広がりますように……

……
のどが乾いて
水にはあぶら

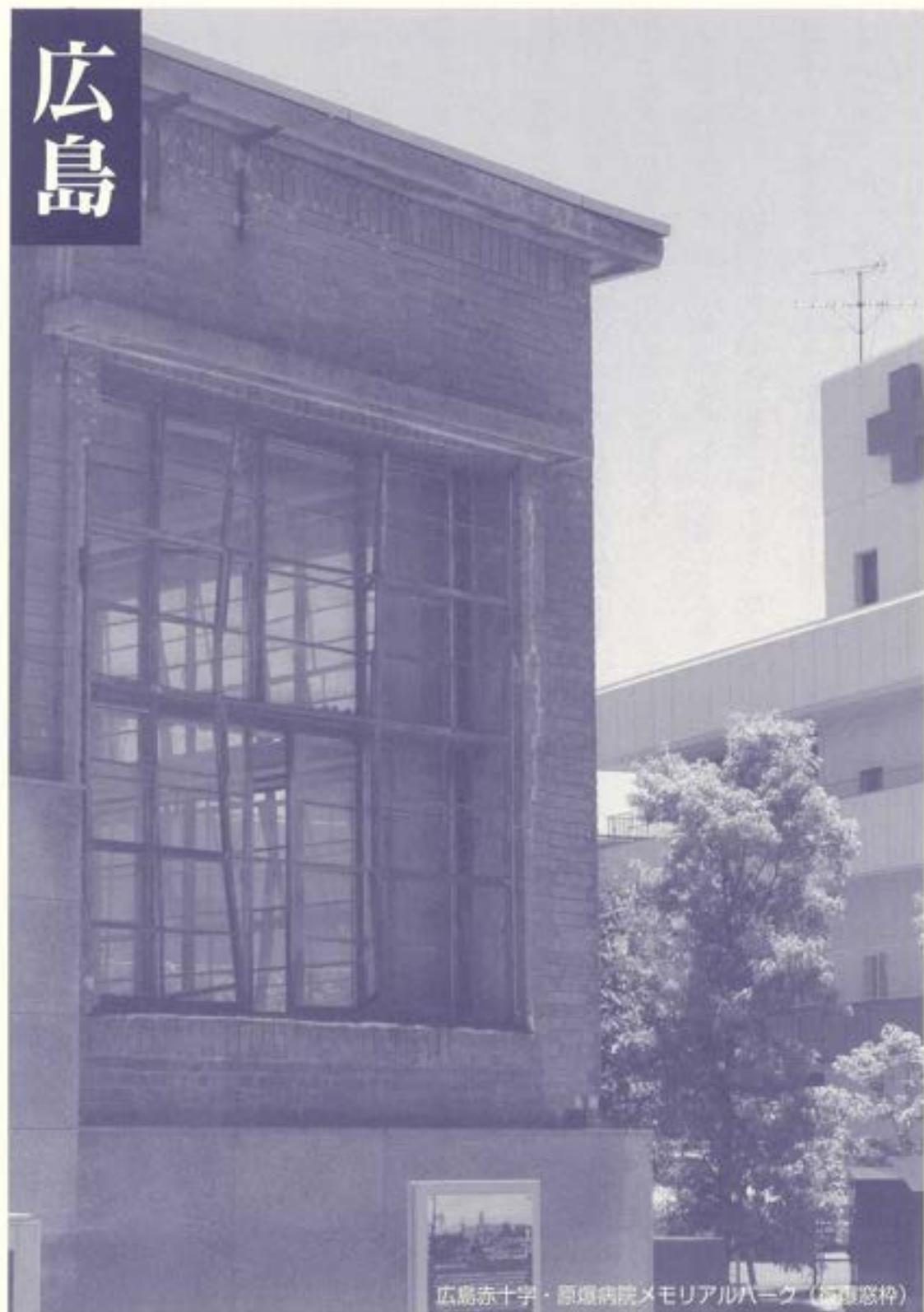
どうしても水が
どうしようあぶらの

——あの日

目 次

広 島 —————	
被爆して 禎子から教わった思いやりの心 佐々木雅弘	6
長 崎 —————	
瓦礫の街で… 永間 実	16
みなさんに感謝 藤井 恵子	22
朗読シナリオ —————	
■広島被爆証言「原爆悲し、川底に眠る被爆者の魂」 小川 淳二	29
■広島被爆証言「世界に届け！広島で被爆した私の声」 三京 育代	35
参考資料	43
あとがき	61
証言集関連 web サイト	62
第 28 集をお読みいただいたみなさまへ	63

広島



広島赤十字・原爆病院メモリアルパーク（原爆窓枠）

被爆して 禎子から教わった思いやりの心

佐々木 雅弘

私は昭和十六（一九四二）年七月、広島市楠木町で生まれました。楠木町は爆心地から一・六キロのところでした。被爆当時、私は四歳でした。

家族は父と母と祖母、そして妹の五人家族でした。父は広島城内の軍隊本部と山陰の山間部にある三次の分隊を、行ったり来たりしていました。

妹は「原爆の子の像」でよく知られている佐々木禎子です。禎子は二つ下とは思えない利発で几帳面、言葉遣いがとても良くて気を配れる子だったと父が言っていました。

空襲警報が鳴ると、禎子が私の手を引いて防空壕に入ります。私が着ていた服を次から次へと道端に投げると、禎子は服を拾い、後ろからついてくる。父が軍隊本部から乗ってきた自転車に、私が「乗せろ、乗せろ」と言うと、禎子は「お兄ちゃんから先に乗せてあげて」と言うんですよ。そんな

子で、それくらい兄貴の面倒をずっと見ていました。

いよいよ八月六日、原爆の日。朝八時十五分、みんな食事の時間で火を使っていました。二キロ以内の木造家屋は全壊し、崩れた家屋に各家庭からの火が出て、たくさんの方が被害が出ました。

ピカッと光つたと同時に、一瞬の温度は約一〇〇万度。二、三秒後、それが地上に落ちてきた時には、三、〇〇〇〜四、〇〇〇度。その熱が広島を覆ったんです。太陽が降ってきたようなものです。だからみんな一瞬にして溶けるんです。

私たち四人はちやぶ台の前に座って、朝ごはんを食べていました。そうしたら、近所のおばちゃんが「佐々木さん、空を見てごらん。綺麗なものが飛びよるけん」と呼んでくれました。食事中なので、おばあちゃんはそこに残っていました。母と私と禎子は外へ見に行きました。強烈に今も頭に

残っていますけれど、本当に綺麗かったですよ。八月六日は快晴で雲ひとつなく、東の空を見たら二機のジュラルミンの飛行機がキラキラ光り、真夏の太陽に照らされて、輝いているわけですよ。初めて見る光景だから「わー、綺麗やね」って、禎子と私と母でいつとき見ていたんです。すると、おばあちゃんが「ご飯の途中だから、早よう入って食べなさい」って言うたんです。しょうがないから、私は家に入り、ちゃぶ台の前に座りました。その途端、原爆が炸裂したんです。

家がぶあーんとなり、どんな風にして壊れたか、分からんですよ。ただ覚えているのは、ひっくり返ったちゃぶ台の四本の足の上に、舞い上がった畳が斜めに全部落ちてきて、その三角の隙間にいた私は、頭をちよつと怪我しました。

母はトイレに入っていて、何にも怪我してなかったです。ただ禎子がない。爆風と共に吹っ飛んだと思って、狂ったように探してね。したら禎子の泣き声が聞こえたんです。「あつ、禎子だ」と言っ、外の方を見たら、どうやってそうなったのか、爆風の影響なのか分かりません。二階に置いてあったみかん箱が家の前に落ちていて、その箱の上に禎子

が乗り、わんわん泣いていました。禎子は傷一つなかったです。

おばあちゃんは家の中にいて、どうもなかったです。「早く食べなさい」と言ってくれたおかげで、運命の瞬間は変わるんです。

そのまま外を見ていた人は、哀れなことですよ。「綺麗、綺麗」と空を見ていた人は顔が溶け、背中を向けている人は背中が溶け、まともに閃光を受けた人は皮膚が溶け、着物の袖みたいに下がるわけです。だらーんとね。

どこもこれも火の手が上がり、母は危ないと思い、私たち四人は太田川をずっと下がった三篠橋に逃れたんです。家からほんの一〇〇メートルです。土手についた途端、大したことはないと思ったのか、おばあちゃんが孫の物や位牌を取りに帰ると言うんです。母がものすごく反対して、やかましく言っただけで聞かんで、引き返したんですよ。帰るといっても火の海ですから、結局、自分の家の前の防火用水槽に頭を突っ込んで死んでいたらいいです。途中、火の中を行っただけから熱かったでしょう。大火傷だと思いますよ。

私たちが川に逃れると、川の中ほどに近所のおじさんが小舟に乗って「佐々木さん」って、呼んでいるんですよ。おじさんが「佐々木さん、早く乗りんさい」と岸に小舟を着けると、そこは被爆した人、水を欲しがると、息絶えている人。死体がゴロゴロです。そんな中、私たち三人は小舟に乗せてもらいました。小舟は原爆の閃光で底の一部が焼けて、穴があいていました。乗ったら水が入り、水がどんどん上がってくるので、泣きながら一生懸命に水を出したのを鮮明に覚えています。

あちこちから「乗せろ」の声が聞こえました。母はおじさんに「乗せてあげてください」と頼んだようです。しかし、おじさんから「佐々木さん、ここはね、助かるもんだけが助からんといけん。誰も彼も乗せたら、諸共死んでしまう。助かるもんが助かる。無情のようだけどね。心を鬼にしなさい」と言われて、母もそれに従ったから今があるんです。おじさんの決断が凄いです。

私たちは流されんように川の中ほどに四、五時間いました。最後の方に黒い雨が降ったんです。黒い雨は爆心地から家の

方を含めて、長楕円形に降り降りました。広島市の一部分です。私たちはその黒い雨に打たれました。

火もたいぶ治まったので、横川駅近くの三滝にある大芝公園に逃れていきました。夕方、大芝公園に三次の分隊に行くトラックが来たので、私たちも乗せてもらい、上川立まで行きました。父と母は、父の出身地が三次で、母の郷が三次のちよつと手前の上川立だったので、万が一の時の疎開地は上川立と決めていたのです。朝からずっと食べていなかった私たちに、兵隊さんが乾パンをくれました。大きくてカチンコチン、足で踏んでも割れないくらいの乾パンを、舐めながら、かじりながら上川立へ行きました。

母の郷から麓に下がったところで、腕のいい職人だった父は床屋を始めました。近所の人から食べ物を買いたり、良くしていただいて、二年間そこにいました。その後、広島市鉄砲町でバラックを建て、床屋を再開しました。

その頃は配給制度というものがありません。配られた切符を持っていないと、何にも買えない。全てが統制ですよ。抑圧感といいますかね。物が無いというのを、現実を感じるわ

けですよ。戦争がいかに惨めか、戦争を味わったものでしか分かりません。

当時、警察の中に経済警察というのがあったんです。闇市を取り締まるための警察です。ある時、母の郷に行き、毛布や砂糖を米と物々交換し、汽車で帰って来ていました。あと三つで広島駅という戸坂で「今日は経済警察が入るげなよ」の声。持っているものを全部捨てないかんです。捨てないと捕まるんです。苦勞して持って帰ってきているのに。母も窓から、ボンボン、ボンボン捨てました。残念で、歯がゆかったですね。禎子と私は、白米のおにぎりが食べられると思つたのに……。



佐々木 禎子 (1955年3月)

鉄砲町での床屋の再開から二年くらい後に、八丁堀に三階建ての家を建て、店も繁盛し、裕福な生活でした。しかし、一九五三(昭和二八)年に父が保証人になり、借金が全部、父にかかってきたんです。家の中は火の車、借金返済に追われるようになりました。

一九五四年十二月、妹の禎子の顎の下が少し腫れてきて、ABCで検査すると白血球の数値が異常に高かったんです。父は近所の小児科医から、「佐々木さん、びっくりしなさんなよ。禎子ちゃん、今この状態から診ると、早ければ三カ月、長くとも一年と覚悟してください」と告げられました。さらに近所のお医者さんで色々検査して、最後に市民病院でも検査すると、白血球の数値が四三、二〇〇だったんですよ。それが一九五五年二月二十日。

父と母は禎子に何も買わなくてやっけない、何とか喜ばせたいと、親戚中からお金をかき集めて反物を買ひ、一晩で母が縫い上げました。それが有名な写真、和服姿の禎子です。

翌日の二月二日、禎子は日赤病院に入院しました。十月二十五日まで八カ月。その間、禎子の苦しみは続くわけですよ。

父と母に心配かけまいと、全部、自分の気持ちの中に収め、痛いとか泣き言を誰にも、一回も言わない。経済的な苦しみを知っているから、自分の治療をしても言わない。自分がわがままを言うとき、父と母がどんなに苦しむかわかっているから…。ただ一回、禎子が母に抱きついて泣いたそうです。母も禎子をしっかりと抱きしめて、そこで泣くしかないんですよ。

八月に名古屋の淑徳高校の赤十字青少年団が、日赤病院に千羽鶴を贈り、その一部を禎子が貰いました。「千羽鶴というのは千羽折ったら願いが叶うんよ」と父から教わり、それから一生懸命折り始めました。八月いっぱい千羽折ったと、同室のお姉ちゃんから聞きました。

十月二五日、今日が山場と連絡があり病室に入ると、母は禎子を抱きながら泣いていました。禎子は私を見つけて「兄ちゃん、来てくれたんね」と言うてくれました。父は禎子の手をとり、「なんか食べたいものはないか」と尋ねました。禎子は「お父ちゃん、お茶漬が食べたい」と言っただけです。私が日赤の先の食堂で、ご飯を買ってこようとすると、禎子

が「日赤のご飯じゃないといらん」と言うんです。父の目配せに、私は日赤から禎子の茶碗を借り、食堂のご飯をそれに移し替え、持っていくと納得してくれました。お茶を入れ、父が食べさせました。「二口目を食べ「おいしい」と言って、病室をぐるーつとゆつくり見回し、「みんな、ありがとう」と言いました。それが最期。十月二五日午前九時五七分、禎子わずか十二年の人生でした。

禎子のベッドの下から、入院した二月二日から七月四日までの「白血球・赤血球・血色素」を書いた一枚のメモが出てきました。禎子はナースステーションのお留守番をするころもあり、その時にカルテを見たのでしょう。何故か三月六日のカルテは日本語で書かれていて、その時点で白血病だったと確信するわけですね。

禎子はそれだけの大病をしながら、すべてのことを我慢し、すべてのことを知りながら、なお、親に心配をさせたくない、逆に自分の親を思いやっただけです。親への心配りを、親より先にしたんです。だから禎子が残したのは、思いやりという究極の心。思いやりとはすべてのものに通じる心が

け。思いやりがあれば、諍いも起きないし、戦争も起きない。この心がけをみなさんで、どうぞ培ってください。今の私が禎子から学んだ考え方はです。

「原爆の子の像」は、クラスメイトの「禎ちゃんの墓を作ろうや」が始まりなんです。「募金しよう！」となり、広島で行われる全国中学校校長会で呼びかけしました。「禎子と同じ原爆で亡くなった子もいるから、一緒に慰霊碑を造ろう」と話が発展しました。

禎子が亡くなって三年後、一九五八年五月五日に「原爆の子の像」が除幕になりました。折り鶴を掲げている女の子は禎子。禎子が折り鶴を折り続けたということが引き金になり、年間約一、〇〇〇万羽の折り鶴が世界中から届けられるんです。禎子イコール折り鶴。折り鶴イコール平和。世界中に定着しました。

自分の周りに小さな平和ができたなら、その小さな平和をありがたいと思う。その小さな平和のつながりが、やがて大きな平和につながっていくと思います。

※ABC C

「本文中に出てくる用語の説明」48ページ参照

※白血球数「はつけつきゆつすつ」

血液中の白血球の数。個人差が大きく、また同じ人でも一日のうちの時間帯によっても変化するが、基準は男女ともに一ミリ立方メートル中に四、〇〇〇〜九、〇〇〇個。基準値を超えた場合には急性感染症や白血病などの血液疾患が考えられる。特に白血病では白血球数が一〇万個以上になることも珍しくない。

※経済警察「けいざいけいざい」

戦時中、経済統制の実施に伴って発生する経済統制法違反を取り締まるために設けられた警察組織。終戦直後の昭和二二年には、ヤミ物資の横行など、経済事犯取締りのため、経済監視官という特別な職種の職員が設けられ、経済取締担当警察官と一緒に行動した。

お話をお聞きして

佐々木禎子さんのお兄様のお話をお聞きするということ
で、緊張と高揚感を覚えるの聞き書きでした。しかし、「何
からお話ししましょうか？何でも質問してください」のお
言葉に、「一気に温かい空気に包まれました」。

佐々木さんとしつかり者の禎子さんのお二人の仲睦まじい
様子。被爆され、逃げ惑うお話。戦後の配給制度や日常の
様子。病魔と戦いながらも、周囲への思いやりを忘れない
禎子さんのお話。そして亡くなったあとも、みんなの心にと
もした平和のお話。「一つ一つ丁寧にお話しただきました」。

当時、白血病の治療は輸血しかなかったそうです。輸血
と血液パックで一〇〇〇が八〇〇円。当時の散髪代が一人
一五〇円だったそうで、治療にどれだけかかったかが、うか
がえます。わがままを言うところ両親を困らせる和我慢してい
た禎子さんが、入院中に一度だけ「お父ちゃん、私ね、今
一五〇円持つてる。いつでもいいから、この一五〇円で注射
して」と電話をかけてきたそうです。

また、ほとんど涙を流さなかった禎子さんですが、病院か
ら帰るお母様がエレベーターに乗り、扉が閉まる瞬間にポ
ロポロと涙を流し、抱きついて泣いたそうです。お母様は
禎子さんをしっかりと抱きしめて、泣くしかなかったそうで
す。禎子さんが亡くなられた後、お父様は毎晩裏の川に行き

「禎子ー禎子ー」と呼んでいらつしやったそうです。

自分の気持ちを押し殺して気丈に振る舞った十二歳の禎子
さんと、支え見守るしかできなかった両親のお気持ちを察
すると、胸が締め付けられる思いになりました。原爆さえ落
とされなければ、幸せで満たされた親子でいられたのと思
うと、改めて戦争が、原爆が許せません。

お元気で過ごさし佐々木さんも、健康には不安を抱えて
いらつしやいます。今でも二カ月に一回は白血球の検査を
されるそうです。被爆者は口に出さなくても、自分もいつか
白血病になるのではと不安を抱えているとおつしやっていま
した。

今回お聞きしたお話は、原爆で亡くなった禎子さんへの愛
と尊敬と思いやりが詰まったものでした。その中で、一番
心に残った言葉です。「禎子は神様から預かった子。だから、
天に召された禎子は神様にお返しした」

どうが禎子さんから学んだ思いやりの心、折り鶴に込めた
平和への願いが世界中に広がっていきますように…。そして、
世界中のみんなが穏やかに幸せに暮らせる日々が訪れますよ
うに…。

お忙しい中、貴重なお話を本当にありがたうございました。
佐々木さんは、今後も多方面で活動予定があるそうです。ど
うかお身体を大切に、ご活躍をお祈りしております。(木村)

今回、佐々木雅弘さんのお話をお聞きしました。五人家族
でしたが祖母、母、妹と四人が広島で被爆され、被爆時の

様子、戦後の食糧難の様子等を聞きました。妹さんは佐々木
禎子さんといひます。十一歳の時、白血病を発症し、闘病中
治ることを願って、千羽を超える鶴を折り、お葬式の時遺品
として配られました。禎子さんのその思いは同級生たちに引
き継がれ、原爆の犠牲になった全ての子どもたちへの慰霊と
して一九五八年五月五日、平和記念公園に「原爆の子の像」
が建てられました。また二〇一五年十一月にトルーマン大統
領図書館に送った禎子の折った鶴が展示されています。

話を聞いて今戦争中のウクライナを思い思っています。いま
は世界の人々が手をさしのべていますが、当時の日本
の国民は誰も助けにくれず、傷の治療もできず飢えながら、
ただ耐えて我慢するしかなかった事を思うと話される言葉が
心に刺さりました。そして佐々木家は家族同士がお互いを思
いやる仲の良い家族だったのだなと感じながら、お話を聞き
ました。

(柳田)

二〇二三(令和五)年三月十日

エフコープ那珂川店にて

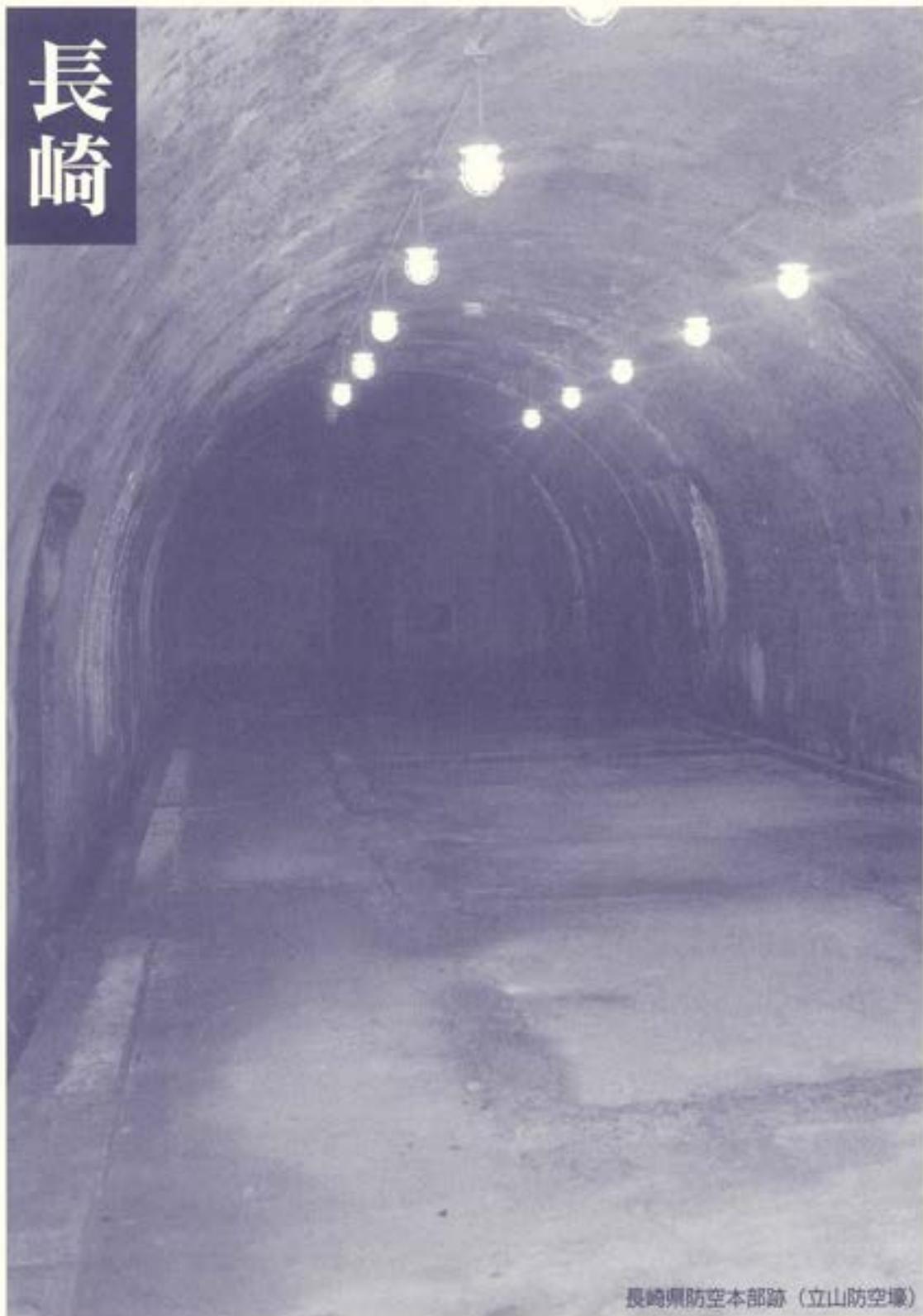
聞き手

木村 桂子 (福岡市)

柳田 さつき (福岡市)

小林 泰志 (エフコープ)

長崎



長崎県防空本部跡（立山防空壕）

瓦礫の街で……

永間 実

生まれも育ちも長崎で、私が住んでいた所は近所のおつきんたちで賑わいよったところです。

小学校の遠足で、堂々と軍歌を歌っていた思い出があります。当たり前でした。日本軍が戦果を上げた時、昼は旗を掲げ、夜は提灯行列ですよ。毎日それをやりました。ひどいものです。子ども心に覚えているのですが、親父だけはじっとしていました。後で考えると、戦争に反対だったんですね。

学生の頃は軍国思想がひどい時代で、私は一本気なところが強かったので、人一倍感化されていました。国の言うことを何の疑いもなく受け入れ、国のために死ぬのは当たり前、命も惜しくないとガキなのに思っていました。みんなもそうだったと思います。

生活全体が不自由なことがいっぱいあったのに、何とも思わなかった。そういう時代でした。すべてがお国のためで、

ろくすっぽ食べ物がなく、毎日が栄養不足で、学徒動員中に誰かが倒れていました。医療機関もなく、治療も水道の水を飲ませたり、冷やしたりするだけ。ひどいもんです。家に帰るまでに自力で回復し、明日も出勤するんです。それでも、お国のために仮病で休む者はいなかったです。

戦時下の思い出は悲しいことばかり。勉強は全然できなかった。精神状態は素晴らしいが、頭は空っぽだったです。中二から学徒動員が発令され、一年目は三日に一回の動員だったのに、中三の二年目からは毎日、朝から晩まで、貨物列車で運ばれた石炭をスコップで下ろす作業。重労働です。工場で働く人は兵隊に行ってしまったので、学生が工場で働き、私はそこで被爆しました。

今は時効だから話しますが、投下当日、飛行機が長崎上空に来ているのに警戒警報が解除ですよ。自宅待機して十

時ごろ解除されたので、家族四人は外に出かけました。祖父は畑、姉と私と父は電車に乗り出動しました。十人家族ですが、働けない幼い子らと母は三〇キロ離れた父の田舎に避難していました。

被爆したのは、学徒動員で長崎駅から約五〇〇メートルの機関区に入っている時で、爆心地から二・五キロの地点です。炸裂の少し前に爆音がしたので、上を見ました。B-29を見つけ、指差した途端に爆裂しました。当時は原爆の知識もなく、体が震えました。視界が長崎の空いっぱい黄色に広がった。地球が爆発したのではと思いました。それが核爆弾。四、〇〇〇〜五、〇〇〇度といわれた熱線を受け、半袖に下駄だった私は、指の形がなくないくらい右手が腫れあがり、足は焼けた下駄の鼻緒だけ残り、左目が潰れ、これで死ぬのだろうと子ども心に観念しました。

爆発の次の瞬間、無意識に伏せたんです。爆風が来て、地面に伏せながら震えました。周りを見ると砂埃が、電柱が、舞い上がる。地球の終わりかなと思いました。しばらくして何とか立ち上がると、右目に入ったのは街全部が一瞬にして

消えてしまった様子でした。福岡はたくさんさんの爆弾で街が壊され、長崎は一発で街が壊された。目に見えない放射線もある。ひどいもんです。その瓦礫の中を四時間さまよった。あの状態でよく歩けたと思う。どうして立ち上がったのかも謎なんです。

行く先々には、人間でないような腫れあがった焼死体がいりたる所がありました。長崎駅の下に防空壕がありましたが、中は周辺の人たちで超満員で寄りつかれん。真っ黒に焼かれた人や、血だらけの人がいました。白いエプロンの人が私に走り寄ってきて、「あんた身体が燃えてるよ」と言いつて、火を消してくれました。自分で気づいていなかったんです。

別の防空壕に向かっている時、また敵機襲来の声。近くの防空壕に入り込むと、同級生から「永間、やられたな」と声かけられました。顔も腫れあがり、誰ともわからない顔なのに、燃え残った名札で声をかけてくれ、すぐに寝かせてくれたのです。その途端に気絶。奇跡的に燃え残った小さなメモで、近くの親戚に連絡を取ってくれ、叔父が助けにきました。叔父の家の防空壕に寝かされた私は、喉の乾きで水が欲し

くてたまらず、苦しさで言葉がありませんでした。よく我慢できたな、よく耐えたな、あの時の自分の強さには言葉がない。今でも不思議です。

叔父の家の防空壕に寝かされて五日目の朝、家族が疎開していた外海から、親戚の救援隊が台車（リヤカー）で私を迎えにきました。私を見て「もう死んでる」「もう死ぬじゃろ」と何度も話しながら、三〇キロを運んでくれました。皮膚が腐って悪臭が酷く、手足も酷い状態で寄りつけないくらいでした。ただ、耳だけは機能していて、休憩の度に運んでいる人たちの話が聞こえていました。

夕方に家に着き、その晩から母と弟たちの大変な看護のおかげで助かりました。「兄ちゃん、帰ってきた」と喜び勇んで学校から家へ駆け込んだのに、あまりの酷さに泣きながら交代でウジ虫を取り除いてくれました。病院がなく、薬もないので、すべてが自宅療法の薬草だけです。今でもよく生きられたなど不思議でならない。私はその年の年末には回復し、正月準備もやりました。

後から聞いた話ですが、八月九日の朝、一緒に出勤した父

は、私より爆心地に近い職場で亡くなりました。姉は勤労奉仕に出ている原爆の直撃を免れ、無傷のまま自力で三〇キロ歩いて帰宅しました。しかし、途中で汚染水を飲んだり、爆心地を歩いたためか、たちまち髪が抜け落ち、体調が悪化し、ものの一週間かそこで息を引き取りました。

私が生きてこられたのは多くの人たちの力と、故郷の恩恵によるものだと思います。担いでくれた救援隊の人たちと会う度に「よう生きとったな」と言われました。なぜか九三年生かされてきました。不思議なことはあります。九死に一生を得たのは、多くの人たちのお陰。だから精一杯生きること、弟たちや、たくさんのお世話になった人々への恩返しをと思つて必死に働きました。

死物狂いで働いたので、二回ほど倒れました。今度ばかりは死ぬと思うくらい、働きすぎです。食べるため、田舎のおつちゃんたちと一緒に農業を十年くらい続けました。弟たちも学校を卒業し、働くようになりました。しかし、食べ物はある仕事もお金がありません。兄弟で話し合い、現金収入がある仕事というところで、私が自衛隊に入り、弟たちが農業をやるこ

とにしました。給料を仕送りし、一番下の弟は大学卒業後、
教職につき、校長にまでなりました。

私ですが、被爆者はたぶん皆、長いこと自分の被爆体験
を伏せてきていました。風評被害もあるし、三〇四〇年草木
も生えないといわれていました。でも次の年には新芽がしま
した。女性も奇形児が生まれるとかで自殺、ケロイドがあり
自殺。母も私のことで一番心配していたのは、私が鏡を見て
どう思うかということでした。顔が半分腫れあがっていたの
で、夏でもほっかむり（頬被り）をしていました。しかし、
年と共に肌がつるつるになってきました。

生徒さんたちの前で話すことがあります。戦争は二度と
あつてはならない。毎日を大事に過ごしてくれ。その先に奇
跡がある。自殺や辛いニュースが多いけれど、自分の身体を
大事にしてくれと。友だちと仲良く、家族と仲良く、国と国
も仲良く、そしたら戦争もない。戦時下で一番苦労したのは
お母さんたちだと思います。食糧不足の中、生活用品もないの
に、子どもたちの面倒を見ながら生き抜かれたお母さんたち
を大事にして、お母さん孝行をしてくれと伝えていきます。

子どもたちの「平和の原点は強健な身体と、人と人、国と国
が仲良くするところに平和ができる」の感想が嬉しいです。
ああいう時代を繰り返してはいけません。みなさんには一日一日
をしつかり考え、精一杯生きてくれと伝えたいです。

※学徒動員「かくとどういん」

「本文中に出てくる用語の説明」49ページ動労動員参照

※機関区「きかんく」

機関車など動力車の運転、運用、整備、保守をする鉄道の
現場機関。旧国鉄では管理局長の指揮下にある独立した機
関であった。

原爆投下による長崎機関区職員の被災者は、死者十九名、
重軽傷者六七名。

※B29

「本文中に出てくる用語の説明」57ページ参照

※防空壕「ぼうくわう」

「本文中に出てくる用語の説明」58ページ参照

※外海「そとめ」

西彼杵半島の西岸（角力灘沿岸）一帯の地域。

昭和三〇（一九五五）年、外海村発足。

昭和三五（一九六〇）年、町制施行により外海町とな
る。平成十七年長崎市に編入。

お話をお聞きして

「人生は奇跡の連続」とおっしゃっていた永間さん。

爆弾が炸裂した瞬間、世界は黄色一色となり、そして黒の世界に変わり、土埃が街を覆う。かろうじて開いていた右目に映った長崎の街は消えていた。そして、それから始まるいくつもの奇跡が永間さんの命を救ってくれたのでした。

もしもあの時、伏せていなかったら…

もしもあの時、火を払っていなければ…

もしもあの時、燃え残ったポケットの名札と連絡先がなければ…

もしもあの時、口がただれず水を飲むことができたなら…

奇跡の一つ一つが幸運をもたらしてくれました。そして、その奇跡は色々な方々の親切や、献身的な看護のおかげもあり、終戦の年の年末には元気になりました。そして、その後には家族のために無我夢中で働いて来られたそうです。

永間さんは「私が生きてこられたのは、多くの人のおかげ。

一日一日を精一杯生きてみよう。それが恩返しになる」と、おっしゃっていました。今回、お話をおうかがいして、力強くお話しされるお姿や張りのあるお声で、毎日精一杯生きて、一日一日を大切にしている様子がうかがえました。

永間さんは小学校で、子どもたちに被爆されたお話をされているそうです。「毎日毎日を大事に精一杯生きて、その

先には素晴らしい奇跡がある。身体を大事に、友だち・家族と仲良く。お母さんを大事にしてくれ」と生徒さんに伝えていくそうです。「ぎつと生徒さんにも響いていると思いますよ」と、嬉しそうにお話しされていた永間さんの柔らかい声と素敵な笑顔が印象的でした。お身体を大切に、これからも多くの子どもたちに、永間さんの貴重なお話や思いを伝えてください。

二度と同じ過ちを繰り返さないため、私たちも被爆された方々のお話を、これからも後世に伝え続けなければと改めて感じました。貴重なお話、本当にありがとうございました。

(木村)

九二歳というご高齢にも関わらず、被爆当時のことをしっかりと覚えていらつしゃって、また息子さんにもいろいろとご協力いただいたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

永間さんは奇跡的に助かり、中学生という若さで、弟さん、妹さんが成長するまで農作物の栽培に携わり、その後、就職先では優秀な成績を収められたことを村中の方が喜んでくださったそうです。

永間さんは、小学校の平和学習で体験談を語られることがあるそうです。家族や友だちとも仲良く、何より戦時下を家族のために戦ってこられたお母さんをおもって、大切にしてい

みなさんに感謝

藤井 恵子

私は昭和十二（一九三七）年十一月に長崎市の大島町で生まれ、七歳の時に入市被爆を体験しました。

家が商売していたので、国からの強制買上げで、竹ノ久保町の三丁目に移りました。大島町にいた時でも焼夷弾がどんどん落ちてきていましたが、竹ノ久保に移ってから、さらに空襲がひどくなるので、私たち子どもは疎開したほうが良いと親がいうので、五歳上の姉たちと、佐賀で農業をしているおじさんのところに疎開しました。

おじさんの家では倉庫の二階に住まわされました。まだ小学校にあがったばかりで小さい私は、父や母のところに帰りたいくて、いつも泣いていました。そのため姉はいつも困って、いろいろなことをして遊んでくれましたが、とても寂しい毎日を送っていました。

姉はおじさんの家の人以上によく働いていました。見てい

てかわいそうなくらい働いていました。おじさんが、薬草履を作るための薬打ちを終えないと眠れなかつたぐらい。朝は廊下の長いところを拭かないと、学校に行かせてくれなかつた。今みたいに給食もないし、私のお弁当のおかずも魚のあるときはいいけれど、味噌に漬けた唐辛子の葉っぱみたいな味噌漬けのようなものは、子どもなので食べられませんでした。そんなんで、お弁当はいつも川の中に捨てよつたんです。ある時、弁当箱ごと捨ててしまい、走って拾いに行ったこともありました。

八月九日はちょうど夏休みで、疎開した先の小学校の運動場で遊んでいた時に、空が黒くなったんですよ。なにか遠くでピカッと光るものを感じ、何かがあったと思つて、すぐに家に帰り、おじさんに「おじさん、あれ何？」と聞いても、「知らなくていい」と言われました。家のことが心配で「長崎

に連れて行って」とせがみましたが、おじさんは煙が忙しいと言つて連れて行ってくれませんでした。

それでも、十二日後に長崎に連れて行ってくれたんです。そしたら家も何もべっちゃんこで、父も母もいません。疎開する前の長崎とは全然変わってしまいました。捜したけれど父も母も、みんなおらん。おじさんと姉と三人でウロウロしていました。あたりの家もみんな潰れてガラガラでした。知っている人に会うこともなく、どうしとるか分からんから、しかたなく佐賀に帰りました。

後に聞いて知ったのですが、母は三歳下の妹が病気になるので、生まれて二カ月ぐらいの弟を連れて長崎病院に入院していたそうです。病院が山の近くだったので、爆弾が落ちたときには裏山に逃げて、三人とも助かったそうです。父と長女の姉は、家の梁の下敷きになっていましたが、夕方、人が通った時に助けていただいたそうです。

私は、佐賀に帰ってから赤痢になって入院したんです。どこの病院だったかわからないけれど、家族は誰もいなくて、一人寂しい思いでいつも泣いていました。赤痢だから何でも

食べられないでしょ。その病院では食事はいつもゴボウの汁だけ、本当にゴボウの汁だけ飲まされた。入院している間ずっと。それをどのくらい飲んだか。入院している間に、他に何か食べたことは思い出せません。ゴボウに助けられたんだから、今でもゴボウ、好きです。隔離病棟だから誰も来てくれなかったのが寂しかった。看護師さんが良かったんでしょね。わりかし人に恵まれている。

それから、どのくらい経ったかわかりませんが、長崎から父、母、姉、妹、弟が佐賀にやってきて一緒に暮らしたんです。家がないので、おじさんの家の近くにあった牛小屋だから馬小屋だかわからないけれど、六畳と三畳ぐらいの部屋を借りて、父がきれいにしてから、そこに家族全部で十一人で住んだんです。母が一人で、子ども全部のご飯を炊いて、洗濯して、食べさせよったですよ。味噌とか醤油も作っていました。母のそんなのを見てきて、私も餅つきとかおはぎとか、お手伝いしました。

佐賀で二年ぐらい生活していましたが、父が「ここにおつても駄目やし、長崎に行つて家でも建てようか」と言つて、

父だけ先に長崎に帰って、竹ノ久保町三丁目に土地を借りて、小さな掘つ建て小屋を作り、そこで生活していました。後に私たちも帰ったとき、近所から植えたばかりのさつまいもを、採ってもいいもんだと思って母に渡したら、人のものだから盗ってきてはいかんと、私は手を縛られ、しばらく放つて置かれたこともありました。佐賀では周りみんながおじさんの畑だったので、母にはそんな風に教えられました。

長崎に帰っても友だちがほとんどいなく、一番仲の良かった同年の七奈子ちゃんに会いに行ったら、被爆して、かわいかった顔がなくなり、火傷がひどく、耳はぶら下がり、足は腫がなくなり肉がぶらさがっていた。夏になるとウジ虫が傷口から出てきます。とてもかわいそうでたまりません。それからあまり会うこともなくなり、七奈子ちゃんは病院に入院しました。被爆した姿の七奈子ちゃんに、私は目を背けるような態度を取ってしまったことを、大きくなるにつれ、佐賀の七奈子ちゃんに話した。私も竹ノ久保から引越したので、その後、会うこともなく、噂では二十歳前に亡くなったそうです。

友だちはみんな、ばらばらになったり亡くなったりで、会うこともなく、私たちは同窓会なんてありません。でもね、佐賀の小学校に行っていた時は、私が長崎から疎開してきたというので、冬は先生が七輪箱を横に置いてくれたりして、親切にしてくれました。

原爆は怖い。核兵器が憎い。二度とあのような思いはしたくないです。戦争は絶対にしてはいけない。今のロシア、ウクライナの戦争のニュースとか見ていられないです。仲良くお互いが思いあつて、二度と戦争がないように語り継いでいってください。

※入市被爆「にゆうしひばく」

原子爆弾が投下されてから2週間以内に、救援活動、医療活動、親族探し等のために、広島市内または長崎市内（爆心地から約2キロメートルの区域内）に立ち入った方。

※広島にあつては昭和二〇年八月二十日まで、長崎にあつては昭和二〇年八月二三日まで。（厚生労働省「被爆者とは」より）

※疎開「そかい」

「本文中に出てくる用語の説明」53ページ参照

お話をお聞きして

藤井さんは、「テレビから流れてくる戦争の画像は見えない」と何度か口にされました。「仲良くお互い思いあつて・・・」という言葉は心からの願いの気持ちを表現されたものと感じられたのです。

「思いあつ」という気持ちを、私たちは生きてゆく上で忘れてはいけない、大切な意味ある言葉なのだ。被爆を体験された藤井さんの言葉のひとつひとつを、きちんと受け止め、「思いあつ」という言葉の大切さを私は、我が子、そして広く多くの人たちに伝えてゆきたい。そう感じました。(小森)

この度、初めて聞き書き活動の貴重な機会をいただきました。た。

七歳で佐賀に疎開された時の生活、原爆投下後十二日目の長崎に入られた時のこと、戦後の生活について、暗く辛い記憶を辿って、慎重に言葉を選びながらお話しくださいました。時々、言葉が止まり、悲しい表情を浮かべておられ、その表情は、当時の藤井さんの悲しさや寂しさを物語るっているようでした。子どもの頃の楽しい記憶は一切ないとお聞きした時、戦争は、幼い頃の記憶に影を落として、心に重くのしかかっってしまうのだと思いました。

戦後、佐賀で生活している時に、周囲の人に支えられたこ

と、生活が大変な中でも、お母様やお姉様が愛情を注いで育ててくださったことを感謝されていると、何度もおっしゃっているのが印象的でした。戦後の生活は苦勞が多く大変だったけど、周りの人に思われたとおっしゃっていました。その恩をお返ししたいとご家族に愛情を注ぎ、困っている人に手を差し伸べていらつしやり、藤井さんの優しいお人柄が伝わってきました。

そんな藤井さんだからこそ、辛い記憶を思い出す事になつても、同じ様な境遇の子どもたちがいない平和な世界が訪れることを願って、お話しくださいましたと思います。藤井さんの思いを大切に、これからも聞き書き活動を通して原爆や戦争の悲惨さを、次の世代へつたえていくお手伝いができたらと、より一層思いを強くいたしました。(中須)

穏やかで気さくなお人柄の藤井さん、初めてお会いするとは思えないくらいお話が弾みました。

七歳で被爆され、原爆投下の時は佐賀のおじさんのところに疎開されていたそうです。その日、長崎方面の空を見ると真っ黒で、すぐさま帰りたいとおじさんに言っても、長崎の街に足を踏み入れたのは原爆投下から十二日目。その時は父や母、家族の誰にも会うことができなかつたそうです。

戦後の疎開先では辛い目に遭うことばかりで、長崎に戻つ

てからの小学生時代も、あまり楽しい記憶がないと語られていました。

頑張り者の母、働き者の姉、優しいご家族に囲まれ、二二歳の時、ご主人とご結婚されました。とつても優しく愛に満ち溢れたご主人だったそうで、本当に幸せだったとおっしゃっていました。ご主人のお勧めで四五歳にダンス、五八歳でカラオケを始められたそうです。ご主人から「ダンスはいいけど、チークはためよー」と言われた、お茶目なお話も伺いました。そんなご主人も七年前に他界され、今はお子さん、お孫さん、ひ孫さんに愛し愛され、日々楽しくお過ごしいらっしゃいます。

お話の途中で、何度も「今は幸せ」とおっしゃっていたのが微笑ましく、私たちも幸せのお裾分けをいただいたような気持ちになりました。私も藤井さんのように、十年後二十年後に振り返り、幸せだったといえる年の重ね方をしたいと思えます。

藤井さんは毎日楽しく過ごさず中で、唯一、今テレビで流れるウクライナの様子は見ていられないとおっしゃっていました。

軍事侵攻・戦争のない世界、核兵器のない世界が訪れ、すべての人々が幸せに過ごせますように……。今回、お話を伺い、被爆体験者のお話や思いを伝えることが、平和への一歩だと

再確認しました。

藤井さん、お子さん、お孫さん、ひ孫さんに囲まれ、いつまでもお幸せで穏やかな日々をお過ごしください。貴重なお話、本当にありがとうございました。
(木村)

二〇二三年（令和五年）四月三日

福岡市中央区ふくふくプラザにて

聞き手

小森 陽子（小都市）

中須 みえ（福岡市）

木村 桂子（福岡市）

小林 泰志（エフコープ）



「つたえてください あしたへ……」 被爆体験証言集朗読シナリオ

■広島被爆証言………

「原爆悲し、川底に眠る被爆者の魂」 小川 淳二 29

「世界に届け！広島で被爆した私の声」 三京 育代 35

この朗読のシナリオは、被爆証言を元に構成されたものです。

高齢化していく被爆者の方々の思いを受け継ぐために作られました。

2004年から、広島・北九州・福岡・その他の場所で開催が行われました。

「あの夏の日のお出来事」を忘れないために、皆さんの身近な小さな集まりで、又、中学校・高校で、朗読会をしてみませんか。

シナリオは段落ごとに分ち書きされていますので、人数に合わせて、読むことが出来ます。

平和への思いの種が、たんぽぽのわたけのように広がっていくように、このシナリオを役立ててほしいと願っています。

(お問い合わせは、巻末のエフコープ組合員活動部まで)

朗読シナリオ
原爆悲し、川底に眠る被爆者の魂

■広島被爆証言「原爆悲し」

小川淳二

(証言集26集より)

ナレーション

忘れられない恐ろしい記憶があります。

一九四五年八月六日 広島で・・・

一九四五年八月九日 長崎で・・・

たった二発の原子爆弾が何万人もの運命を狂わせました。

かろうじて生き残った人々も、目に見えない放射能の恐怖と向き合ってきたのです。

日本は、戦争で核兵器として、原子爆弾を使われた世界でただ一つの国です。

忘れてはいけないその記憶を私たちが引き継ぐことをやめた時、

人類は破滅へと突き進むのではないのでしょうか。

朗読者 ①

一九四五年八月六日 広島・・・小川淳二さんの証言です。小川さんは当時十九歳でした。

朗読者 ②

私は今、九五歳ですよ。生き残って真実を語る人間は私しかいない。

朗読者 ③

だから、いよいよ最後と思い、聞いていただきたいです。

昭和二〇（一九四五）年、私は広島市白島西中町（現在の広島市中区）に住んでいました。爆心地から一・五キロの所でした。爆心地は原爆ドームのある場所です。爆心地の真下は約三、〇〇〇〜四、〇〇〇度。被爆した人は灰も骨も何もありません。

朗読者 ④

その当時、私は今で言うたら広島大学工学部二年生で十九歳でした。我々理系の学生ぐらいいしか、残っていないなかったんですよ。文系の学生は皆、戦争に行ったり、多くが死にました。ある日、学校の学生部長から、電報が来ました。

（別の人の声）

「八月一日付けで、学徒戦闘隊を結成。隊長を命ずる」

それは小川くんが隊長で、最後の最後まで戦って頑張ってくれという命令でした。皆さん、沖縄戦が終わった日はご存知ですか・・・。

六月二十三日、沖縄戦はアメリカ軍の上陸で、日本軍は激しく戦い、負けて終わりました。その後、いよいよ戦争は激しくなってきた、日本国民は全員、最後まで戦えということです。

朗読者 ⑤

そして八月六日朝、私は学校からの命令書を受け取りに行く途中で、原爆にやられたわけです。軍隊通りという、戦車でもガンガン走れるくらいの広い道があります。

ここを歩いている時に、原爆が落とされた。爆心地から一・二キロの場所です。爆風で、私は吹き飛ばされて、地面に叩きつけられました。

いろんなものが飛んできて、全身怪我だらけ。頭も鼻も切って、血だらけになりました。

けれど縫うた跡は全然ないですよ。血が出たら、死んだ女の人のもんべをちぎって、包帯の代わりに括っておくだけです。

私の住んでいた白島に長寿園という立派な公園がありました。桜の木が三〇〇本ぐらいあったでしょう。花見の時には茶店も出て、みんなそこに行きましたよ。

泳ぐ人、魚釣りする人、遊びに行く子どもたちは兵隊ごっこをしたり賑やかでした。

この公園は避難所で、ここに逃げるといふ事になりました。

それが八月六日、原爆の時には逃げきれずに死ぬ人がいっぱいいました。

やっと辿り着いた人も、片っ端から死んでいったのです。

警察も消防も軍隊も全滅ですから、助けてくれる人は誰もいません。

原爆の直後から、街は一面の焼け野原でした。一、三日目に、広島周りに、戦争に行けな

いようなお年寄りの医者が来ました。若い医者は戦争に行っているんです。

その頃、衛生兵と言ったりしましたが、看護兵ですよ。

医者がその看護兵を二人連れて、三人で来たんです。

けれども、助けるというても何もありません。火傷の薬といっても、チンク油を塗る程度です。

そのチンク油も、あつという間に無くなってしまふ。

だから戦争の役に立つような人間だけを助けるんです。

赤ん坊や子どもも、助けないけど助けようがないんです。もう死にかけてる人は、それで終わりです。ひどい話ですよ。

朗読者 ⑧

当時、広島には七つの川が流れていました。川辺に料理屋があったり、家に人が住んどったりしたんです。しかし原爆で家ごと焼け死んだ人、大火傷の人など、多くの犠牲者が出ました。逃げ場を失った大勢の人が、叫んでいました。

別の人の声 ①

別の人の声 ②

別の人の声 ③

「誰か助けてくれー 助けてくれー」

「お母ちゃん、助けて。お母ちゃん、どこ？お母ちゃん、出てきてー」

「もう私はだめ、火が回ってくるから、早よう逃げなさい！」

そういう状態で、行くところもなく、みんな川に飛び込んだのです。

朗読者 ⑨

(別の人の声)

助かった者は、何をしたかというたら、死体を焼く係です。私も引つ張り出されました。死体にウジ虫が発生して腐ってきますから、早く焼かにかいかん。

そこらの焼け跡の焼けぼつくりを積み重ねて、その上に死体を置いて燃やすわけです。生き残ったお年寄りやらが、次から次に死体を積んで持つて来て言われるんです。

「小川さん、これをお願いします」

そりやもう、大変ですよ。朝から晩まで、全員無表情。涙も流していません。

もう感覚が完全に麻痺しています。

朗読者 ⑩

三、四人の学生で死体を焼き続けたんです。誰もが言葉や言う気力も無くし、頭がどうかなってしまっている。川の土手で死体を焼き、その後はどうします？・・・

川に捨てなしようがないじゃないですか。もう片っ端から川に流すわけですよ。

その場所は牛田町の神田橋そばです。その近くに、小さな公園があります。

観音様の像やら、キリスト教の像やら、いっぱい建っている珍しい公園です。

爆心地に元安川というのがあります。友だちは白骨川ってね、皆、言うたんですよ。

昭和二十一年、終戦の翌年、元安川で洪水がありました。

何で水が流れんかというのと、川底に骨がいつばいで、それにゴミが溜まって、流れんようになってたわけです。

「原因は何でか？骨だと？それなら・・・」と、アメリカ軍が川の中の骨を、重機でわーっと積み上げて、火をつけて燃やしたんです。そうせんと川が止まってしまおう。

それは元安川だけではなく、他の川も骨がいつばいなんです。

広島原爆で死んだ人は約十四万人。その内の身元の分かった人は約七万人です。

何とか親父らしい骨があったとか、これがうちのお母さんかなと言っていて、拾える人は皆拾った。行方不明者は、川の中に飛び込んだか、瀬戸内海に流れていったか、未だにどこに行ったか分かりません。

ですから、広島に来られる方、新幹線や山陽本線に乗る方も、川の上を通る時には、この川の底にたくさんのお骨が今も眠っているという事を、皆さんに分かってもらいたいです。

どうか祈ってください。もちろん広島には、いい所もいつばいありますよ。しかし、戦争の犠牲者があって、私は今日があるのだと思います。

これまでに色々なことも一生懸命やってきました。

戦後、仕事を五十年、そして原爆の語り部のボランティアを三十年やってきました。

改めて、今日あるのは誰のおかげか、よく考えて行動して欲しい。それを最後に申し上げます。

話は山ほどありますけれど、さて終わりにしますか。

皆さん、ありがとうございます。

この証言は二〇二〇年、小川淳二さんが九五歳の時にお話しされたものです。

小川さんは、翌年、亡くなられてこれが最後のお話になりました。

平和な世の中になることを信じ、犠牲になった多くの人の思いを、私たちは決して忘れてはならないと思います。

戦争を起こすのも平和を守るのも私たち人間です。

戦争や争いがなく穏やかな状態……

「平和が好きです」

つたえてください あしたへ……

朗読シナリオ 世界に届け！広島で被爆した私の声

■ 広島被爆証言 「世界に届け！広島で被爆した私の声」

三京育代

(証言集27集より)

ナレーション

忘れられない恐ろしい記憶があります。

一九四五年八月六日 広島で・・・

一九四五年八月九日 長崎で・・・

たった二発の原子爆弾が何万人もの運命を狂わせました。

かろうじて生き残った人々も、目に見えない放射能の恐怖と向き合ってきたのです。

日本は、戦争で核兵器として、原子爆弾を使われた世界でただ一つの国です。

忘れてはいけないその記憶を私たちが引き継ぐことをやめた時、

人類は破滅へと突き進むのではないのでしょうか。

朗読者 ①

三京育代さんの証言です。三京さんは当時八歳でした。

朗読者 ②

当時、私は広島の横川一丁目に住んでいました。爆心地から一・三キロのところですよ。

家族は五人で、父、母と国民学校（現在の小学校）四年生の姉、八歳の私、生まれたばかりの妹でした。

日本の都市のあちこちが、アメリカの爆撃機B29の大空襲でやられていました。

家の玄関には、いつでも持ち出されるように、非常用袋や頭を守る防空頭巾などが用意してありました。

白いご飯が食べられない時代でした。ご飯の代わりにお芋とか、おかゆ、すいとん（だんご汁）だったんです。

国民学校二年だった私は、近くの集会所とか公民館のようところで、避難訓練、啓蒙の手当などを習っていました。学校での勉強はありませんでした。

戦争が激しくなっていく中で、三年生以上の児童は親元を離れて集団疎開をさせられたのです。疎開というのは空襲から身を守るため、都市から地方へ避難することです。

四年生の姉も遠くの川根村（現在の広島県安芸高田市）のお寺へ疎開をしました。姉はひもじさと、寂しさで、耐えきれなかったようで、泣き叫んだそうです。

「家に帰りたい、帰りたい。死んでもいいから帰りたい。連れて帰って！」
「八月六日に迎えに行くから、待っていらっしやい」

父は姉に言ったそうです。

八月六日の朝早く、父は姉をうちに連れて帰るため、疎開先の川根村に出かけていきました。その日の朝、私はまだ眠っていました。

育代の声

八時十五分、原爆が落とされ、ものすごい音と暗闇。「あつ、死ぬ」と思ったのです。しばらくして、壊れた家の中を見回すと、誰もいない、窓も戸もなくなっていました。

「お母さん、お母さーん」

家の外に出て、泣き叫びました。

真ん前の家のおばさんが叫んでいました。

「子どもが家の下敷きになって、引っ張りだせないんよ。誰か助けてー」

おばさんの声

ふと見ると、台所で下敷きになっていた母が這い出てきました。

母は窓ガラスの破片が突き刺さり、頭、顔、腕と傷だらけでした。

ザクロのように傷口が開いた腕に、赤ん坊の妹をしっかりと抱いていましたが、妹も血まみれでした。母は妹を夏布団でくるみ、私に長靴と防空頭巾をつけさせました。

朗読者 ⑤

川沿いの道に出ると、すでに大勢の人がぞろぞろと歩いていて、その光景は今でも忘れられません。大やけどをして、ペロペロになった皮を手先にぶら下げて、歩いている姿は、おばけの行列のようでした。

土手の向こうの材木置き場が勢いよく燃え始め、母が叫びました。

「橋に火が移ると渡れなくなるから、急いで！早く！早く！」

私が死にも狂いで橋を渡り終え振り返ると、橋は焼け落ちていました。

母の声

朗読者 ⑥

川には大勢の死体が浮いていました。

向こう岸に、真ん前の家のおばさんが、気が狂ったように走っている姿も見えました。

下敷きになった幼子を助けられないまま、炎に追われて逃げてきたのでしよう。生きたまま焼かれていく我が子を家に残してきたのですから。こんな生き地獄のようなことがあっていいのでしょうか。

私たちはガラガラ照りつける太陽の下を、郊外へ向かってそろそろ歩いて行きました。群れの中に、近所の中学生の女の子がいて、校庭で熱線を受けたのでしよう。背中一面が焼けただれて、体の前の部分だけ白いシャツと黒いブルマーが張り付いていました。

よたよた歩いていましたが、いつの間にか消えてなくなり、その後どうしたのかわかりません。

突然、油っぽい黒い雨が降り始めました。雨を避け、長いこと橋の下で雨が止むのを待っていました。横川から安村（現在の広島市相田付近）の避難所まで、ずっと歩いて行っただけです。途中で、バケツを持った田舎の人が私たちに言いました。

「水を飲みませんか？水いりませんか？」

私たちも水が欲しくて、のどが潤いてたまりません。

「水を飲んだら良くないよ。飲んだら倒れるよ」

「水を飲んだらだめ！」

そう言う人もいて、飲ませてもらえませんでした。

避難所の学校は救護所になっていました。

血まみれの赤ん坊の妹は、初めて体を洗ってもらいました。しかし、まったくの無傷だったの

です。妹は母の怪我の血を浴びていただけで、周りも驚きました。

私もケガはたった一つ、右目の下を何かで切った傷だけでした。運が強かったのでしょうか。母の傷は深く、ガラスの破片が食い込んでいました。

取っても取っても、後から後からガラスが出てきました。

一個のおにぎりが配られ、むさぼり食べました。美味しかったことが忘れられない思い出です。民家に泊まらせてもらって、寝るところを与えられました。

姉を迎えに行った父は、その後、私たちを探しに来て、やっと会えました。

「広島街はすっかり焼けてしまって、帰る家もないんだ。命があっただけでも喜ばなければね」父はそう言うのでした。

その後、知り合いの人が戸山村（現在の広島市沼田町）に行くというので、一緒に戸山村に向かいました。その晩に、白いご飯ときゅうりの酢の物を食べたことが印象に残っています。

戸山村に着くと、村の皆さんのおかげで、大きな家の離れに住まわせて買いました。

当時の村長さんがとても親切な人で、何もかも無くして、身ひとつで逃れてきた人を、ちゃんと引き受けてくださいました。

その静かな村にも原爆の負傷者が次々と運び込まれて、亡くなっていきました。戸山村にいた時、忘れられない思い出が二つあります。

ひとつは、住まわせてもらっている家の息子さんのこと。

息子さんは広島第二中学校に通っていて、即死されたそうです。全員即死だったそうです。

家のお母さんの声

そこのお母さんが、繰り返して繰り返して、毎晩嘆き悲しまれるうめき声。

「やれのお、やれのくお、やれのくお」

その声が、今でも耳の奥に残っています。

もうひとつは、同級生が戸山村の学校にやってきました。

驚いたことに、熱線を浴びて火傷をした顔の半分が酷いケロイドでした。

しかし、ある日突然、学校に来なくなりました。原爆症が出て、髪の毛は抜け、高熱を出し苦しんで亡くなったと、後から聞きました。

朗読者 ⑫

近所でも多くの方が亡くなりました。

一家全滅の人もいっぱいありました。

私の家は倒れても、ベシヤンこにならんかった。奇跡だったのかもしれない。

生きるも死ぬも紙一重で、生死を分けた悲しい知らせに、胸が締め付けられるようでした。

私たちは戸山村に十一年間、暮らしました。

朗読者 ⑬

別の人の声 ①

別の人の声 ②

別の人の声 ③

一発の原子爆弾が、多くの幸せな家庭を壊し、命を奪いました。

もし、あの時、両親が爆死していたら、私は原爆孤児だったので。

もし、あの時、家の下敷きになり抜け出せなかったら、私は生きたまま炎の中で焼かれて死んだでしょう。

もし、あの時、爆心地から五〇〇メートル圏内に住んでいたら、私はあつと声を出す間もなく、黒焦げで死んだでしょう。

一九八一年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が、広島を訪れて残された言葉です。

「戦争は人間がやることです。戦争は人間の命を奪います。」

戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。

広島を考えるということは、核戦争をやめることです。

広島を考えるということは、平和に対する責任をとることです」

今、世界で何が起きているのかを知ることが、平和を作り出す第一歩です。

歴史から平和を学びましょう。人間の生き方の基本は、今も昔も未来も変わりません。

戦争は人の心の中から生まれるものだから、人の心の中に、崩されることのない平和の砦を築かなければなりません。

私は夫の転勤で福岡に移り住み、約三十年が経ちました。

六十代に福岡市のいくつかの小学校、中学校で被爆体験を語りました。

また、七十一歳の時（二〇〇八年）、ピースボートの「一〇〇人の被爆者を地球一周の旅へ」という船旅に参加しました。大型客船で二十二カ国を巡る四カ月の船旅で、地球の一部を知る

ことができました。

私たちには、世界に被爆者の思いを伝える使命があり、それぞれが力を出しながら、忘れられない体験になりました。

スペインのラス・バルマスには、「ヒロシマ・ナガサキ広場」と名付けられた広場があり、「憲法九条の碑」が建てられています。そこで私は証言の挨拶をしました。

日本は、「戦争放棄」を示した日本国憲法第九条があります。

その憲法九条が守られていることで平和であるという話を述べたように思います。

広島で被爆した私の声を、世界に届ける旅でもありました。

地球の平和を願い、二度と核兵器を使つてはなりません。物言わぬまま亡くなった人に代わり、被爆体験を伝える機会があれば、今でも活動が続けています。

この証言は二〇二二年、三京育代さんが八五歳の時にお話しされたものです。

平和な世の中になることを信じ、犠牲になった多くの人の思いを、私たちは決して忘れてはならないと思います。

戦争を起こすのも平和を守るのも私たち人間です。

戦争や争いがなく穏やかな状態…

「平和が好きです」

つたえてください あしたへ……

參考資料

広島



原爆投下時刻

広島 一九四五(昭和二〇)年八月六日

午前八時十五分

長崎 一九四五(昭和二〇)年八月九日

午前十一時〇二分

爆心地

広島 広島市中央部 細工町一九番地

島病院敷地内上空五八〇m

(誤差±十五m)

長崎 松山町一七一番地

テニスコート上空約五〇三m

(誤差±一〇m)

被爆直後の死亡者

広島 十四万人(誤差±一万人)

長崎 七万人(誤差±一万人)

※一九七六(昭和五二)年の国連事務総長への報告による。死亡者数は現在まで何度か様々な方法で調査されているが、今なお数は確定されていない。

被爆した外国人

広島

朝鮮人 推定約三〜五万人が被爆し、

五〇〇〇〜八〇〇〇人が死亡。

中国人 推定二〇〜二〇〇人以上が死亡。

捕虜 米軍兵士十二人他九人が被爆。

少なくとも一〇人が死亡。

八日に撃墜されたB29搭乗員一〇

人が宇品に収監され入市被爆。

長崎

朝鮮人 推定一万〜一万五〇〇〇人が被爆し、

一五〇〇〜二〇〇〇人が死亡。

人類初の核兵器

アメリカが原子爆弾製造のために、科学者、技術者を総動員したマンハッタン計画（総括責任者レズリー・グロウヴス准将、科学部門の開発総責任者ロバート・オッペンハイマー）により、人類初の原子爆弾が誕生したのは一九四五年七月十六日、ニューメキシコ州アラモゴードの砂漠にある軍事基地だった。この原子爆弾はガジェット(Gadget)というコードネーム呼ばれ、長崎に投下されたファットマンと同じタイプであった。マンハッタン計画によって開発された原子爆弾は三つのタイプがあった。

Mark I リトルボーイ (Little Boy)

ガンバレル方式のウラン型原爆で、いわゆる「広島型原爆」。人類史上初めて実戦で使用された核兵器である。開発当初の設計寸法よりも短いものとなったためリトルボーイ(少年)と呼ばれた。約五〇キログラムのウラン²³⁵が搭載され、このうち核分裂を起こしたのは一キログラム程度と推定される



ガジェット

が、これはTNT火薬一五、〇〇〇トンに相当し、B29三〇〇機分の通常爆弾が一度に投下された計算になるという。リトルボーイタイプの核実験は、大戦中には行われていない。

Mark II シンマン (Fat Man)

ファットマンと同じくプルトニウムを原料とし、リトルボーイと同じガンバレル方式を採用していた。筒状の形状とルーズベルト大統領にちなんでシンマン(瘦せた人)と呼ばれたが、十分な核分裂を起こすことが困難と考えられ、爆弾容器の投下実験などは行なわれていたものの、一九四四年七月に開発は中止された。

Mark III ファットマン (Fat Man)

プルトニウム²³⁹を使用したインブロージョン(爆縮)方式の核爆弾。長崎に投下された。試作のガジェットを含め合計三発が製造され、最後のファットマンは一九四六年マッシュアル諸島のピキニ核実験場で使用された(クロスロード作戦)。



トリニティ実験の爆発 10 秒後



広島の際爆投下に使用された
B29 ENOLA GAY
(エノラ・ゲイ)



長崎の際爆投下に使用された
B29 BOCKSCAR
(ボックス・カー)

ファットマンが特異な形状をしていることから、投下後の動きを確かめるため、同じ形状の模擬爆弾で投下実験が繰り返された。この模擬爆弾は爆薬重量二・八トン、総重量四・八トンの巨大なもので、黄褐色の塗装と形から、「パンフキン(カボチャ)」と呼ばれた。七月から八月十四日まで四九発が日本各地三〇都市に投下され、多くの被害をだした。

原爆投下の決定

一九四五年五月の段階での原爆投下目標は、①広島②小倉③京都④横浜であった。このとき以下の三つの基準が示された。

・直径三マイルを超える都市にある重要目標・爆風によって効果的に破壊できるもの
・同年八月まで爆撃されない都市

広島は陸軍施設が集中し、地形的にも原爆のエネルギーが効果的という理由から、当初より最重要目標とされていた。

六月に入って長崎・新潟が候補に上がったが、新潟は都市規模と戦略的意味からはずされ、長崎は地形的な理由と捕虜収容所があることなどで論議があったものの、海軍の主要な軍港であり、軍事施設が集中していることから、七月二四日、最終的に「①広島②小倉③長崎」に決定。七月二五日、トルーマン大統領が原子爆弾投下の指令を承認し、陸軍戦略航空総指揮官あてに原子爆弾投下が指令された。ここで八月三日以降の目視爆撃可能な天候の日に「特殊爆弾」を投下することが決定された。

※原爆投下第二目標

八月九日の原爆投下の目標は小倉であったが、当日の小倉上空は厚い雲におおわれ、目視爆撃ができず、約一時間後戻したのち、第二目標の長崎に向かった。

仮に最初の標的であった小倉市に投下されていれば、関門海峡が丸ごと被爆し、現在の北九州市一帯と下関市まで被害がおよび、死者は広島よりも多くなっていたと推測される。戦後この事実があまりに became こと、目標地点であった小倉陸軍造兵廠跡地（現勝山公園）に慰霊碑が建てられ、毎年八月九日には北九州市民による慰霊祭が行われている。

原爆の威力

熱線

原爆は爆発の三秒後には、直径二八〇m、七〇〇度の火球となり、地上到達温度は三、四〇〇〇度に達する。これは広島・長崎の上空五〇〇mに太陽（表面温度六〇〇〇度）が出現したのと同じ熱線が放射されたことになる。爆心地から五〇〇m以内は完全に焼き尽くされ、二km付近でも自然発火。二kmから四kmの範囲で戸外でまともに熱線をうけた人は火傷し、ケロイドとして残った。

爆圧

原爆の全エネルギーのうち約半分が爆風のエネルギーになったとされ、爆心地直下では風速四〇〇m/秒以上という音速（三四九m/秒）を超える衝撃波で、あらゆるものを吹き飛ばした。

放射能

原爆はウランやプルトニウムのような放射能をもつ元素を核分裂させるため、爆発にもなっておびただしい放射性を帯びた物質がつくられる。放射線が被曝後三〇日以内に死亡するには七〇ラドといわれるが、広島では六〇〇ラド、長崎では七〇〇ラドという強力な放射線がおそった。

原爆の被害はTNT換算による爆発の熱や爆風だけでなく、原爆症と呼ばれる放射線障害や白血病、癌などの病気を被曝者に引き起こし、その影響は現在も続く。

※ラド（吸収線量）

どれくらい放射線が入るかを表す単位。現在はグレイ（1グレイ＝100ラド）で表示される。



右からの爆風で屋根が無残に落ちた兵器工場（長崎）



熱線によって肌の濃い部分が肌焼けついた。（広島）



幼火の中で手を取りあう母子を形どった慰霊碑と長崎市から贈られた「長崎の鐘」のレプリカ（北九州市小倉北区勝山公園）

砲部隊（陸軍船舶部隊）

【あかひきばたご（りくぐんせんぱくばたご）】

戦時に軍隊の物資等の船舶輸送を指揮統率した船舶司令部が統括した陸軍の船舶部隊。

兵団の符号「砲」から「砲部隊」と通称された。全国の軍港に配置され、各軍管区とは別に参謀本部の直接指揮下にあった。戦争末期になると一部は「マルレ」の秘匿名でよばれる特攻艇の基地となった。

広島では宇品港に船舶練習部と司令部が置かれ、船舶通信部および通信練習部は市内中心部に近い比治山に配置されていた。

原爆投下時には、爆心地から至近距離の中国軍管区司令部が壊滅したことにより、通信部を除いた部隊は事実上、広島における唯一の実働部隊となった。このため「広島警備本部」として市内の救援活動に従事し、部隊員の中から多くの二次被爆者を出すことになった。

衣料切符（いりょうきつひ）

戦時中の物資配給制度のもとで、衣料を公正に分配する目的で官公庁が昭和十七（一九四二）年から発行した点数制による切符。戦争の激化により点数が減らされたうえ、現物はほとんど配給されなという状態となった。

馬の死骸（うまのしがい）

当時は軍需工場からの運搬に荷馬車を使用し

ていたため、長崎など軍需工場の多い所では、大量の馬や牛が動員されていた。

ABCCC

原爆傷害調査委員会 (Atomic Bomb Casualty Commission) の略

昭和二一（一九四六）年、「広島・長崎の原爆放射線被ばく者における放射線の医学的・生物学的晩発影響の長期的調査を米国学士院 (NAS) — 学術会議 (NSF) が行うべきである」とするトルーマン米大統領の命令で設立された。放射線の影響の調査研究に専念し、医療器具もスタッフもそろっている（ように見える）のに、治療をしないことで多くの被爆者が反感を持った。現在の放射線影響研究所の前身。

応召（おうしょう）

召集の命令によって軍隊に入ること。

海軍工廠（かいぐんじょう）

海軍直営の軍需工場。艦船、航空機、各種兵器、弾薬などを開発・製造した。航空機の修理整備（空廠）、火薬製造・充填（火薬廠）、石炭採掘や石油精製（燃料廠）、軍服・保存食製造（衣糧廠）、医薬品・医療機器（療品廠）などがある。

学童疎開（がくどうそかい）

昭和十九（一九四四）年の閣議決定により全国十三の都市に住む児童を、八月から半強制的に地方へ疎開させた。田舎に親戚など縁故

のある児童が、単身または家族と共に疎開する「縁故疎開」。学校や学年ごとに地方の旅館や寺に集団で疎開する「集団疎開」。病弱等で家庭を離れがたいため、親元に留まる「残留疎開」があった。当初三年生から六年生までが対象だったが、空襲の激化に伴い昭和二〇年三月からは一、二年生も疎開の対象となり、全国で合計百万人の児童が対象となった。

艦載機（かんさいき）

航空母艦などの軍艦から発進する戦闘機や小型の爆撃機のこと。

機銃掃射（きじゅうそうしゃ）

機関銃で前後・左右、一帯をつづけざまに撃つこと。

機雷（きらい）

機械水雷の略称。水中に敷設または放流して艦船を破壊する兵器。通過する船舶に接触したり磁気を感じて爆発する。B29や潜水艦によって日本列島周辺に約一万个が投下または敷設された。

玉音放送（ぎよくおんほうそう）

天皇の肉声（玉音）を放送すること。

特に昭和二〇年八月十五日正午に、昭和天皇による終戦（ポツダム宣言受諾）の詔書の音読放送を指すことが多い。

放送は当時、日本で唯一の放送局だった社団法人日本放送協会（現在のNHKラジオ第一

放送)で玉音盤(天皇の声を録音したレコード盤)により放送された。天皇の声が電波に乗って正式に放送されたのは、玉音盤によるものが最初。

魚雷【ぎょらい】

魚形水雷の略。水中を高速移動し、衝突・爆発によって艦船などを破壊する兵器。日本が世界で初めて開発に成功した九三式酸素魚雷は、それまでより高速・長射程で、最大の特徴は雷跡(魚雷の航跡)が目立たないことだった。

金属供出【きんぞくきょうしゅつ】

戦局の悪化とともに兵器の材料となる金属が不足したため、昭和十六(一九四一)年の国家総動員法にもとづく金属類回収令により、公共機関の金属製品の回収と同時に、民間工



学徒動員労働員

(写真「21世紀への道程 - 福岡市原爆被害者の会」より)

場や一般家庭からも金属製品の提供運動が行われた。

動員労働員【きんろうどういん】

戦争が長期化するにつれ、軍需産業は拡大し、労働力が必要となった。このため老人や徴兵年齢に満たない学生、女子学生までもが徴用や学徒動員によって、学徒報国隊・女子挺身隊として軍需工場にかり出された。

勤労報国隊【きんろうほうこくたい】

青壮年男子の徴兵により、すべての産業で労働力不足となった。昭和十六(一九四一)年八月、文部省は学校報国団の編成を指示し、各学校ごとに学校長を団長とする報国団を結成させた。この報国団が軍需産業に労働力として送り込まれた。十一月の国民勤労報国協力令公布により、十四〜四〇歳の男子、十四〜二五歳の未婚の女子による国民勤労報国隊(通称挺身隊)が組織された。さらに昭和十九年八月には「学徒勤労令」、「女子挺身勤労令」が公布され学徒や女子の学徒動員が強化された。

空襲警報【くわいしゅうけいほう】

爆撃機の飛行コースや高度によって空襲が予想される地域にサイレンやラジオなどで伝達される警報のこと。昭和十二年の防空法施行令で空襲警報の基本規定が置かれ、「航空機ノ来襲ノオソレアル場合」に発令される「警戒警報」と、より切迫した「航空機ノ来襲ノ危険アル場合」に発令される「空襲警報」の

二段階で警報が発せられ、「防空警報」と総称した。

黒い雨【くろいあめ】

原爆の炸裂後に降った粘り気のある、真っ黒で大粒の雨のこと。低高度で炸裂した原爆により発生した原子雲(キノコ雲)の熱気は上空で冷やされ、雨となった。この雨は大量の粉塵(放射性降下物)を含んでおり、雨を浴びた者を被曝させ、土壌や建築物および河川などを放射能で汚染した。

軍事教練【くんじきょうれん】

中学校や青年学校などの学生に対し、銃の操作や行進など、兵士としての基礎訓練から、実戦さながらの訓練までを行うこと。明治時代から兵式体操という名で学校教育に組み込まれていたが、昭和に入ると陸軍の現役将校が中等学校以上の学校に配属(配属将校)され、さらに指導が強化された。

軍属【くんぞく】

軍隊に勤務する軍人以外の民間人の総称。政務次官や書記官などの文官、技術者や設備隊員(土木作業員)、野戦郵便局員、事務員など。基本的にはその役割に応じて軍人の階級に準じた待遇であった。

ゲートル

巻脚絆のこと。活動時に動きやすくするため、足のすねの部分のスポンの上から帯状の布で

巻いた。戦時中、中学生以上の男子は外出時には必ずゲートルを巻くよう指導された。

また革脚絆（レギンス）は面積のある一枚もの布や革をすねの部分にバックルやボタンで固定するタイプのものである。

現役（兵）**げんえき**（へい）

平時から軍に属している兵士のこと。または徴兵検査に合格し、指名を受けて即時入営した兵士。兵役期間が過ぎて現役を離れると予備役や後備役あるいは退役軍人となる。

原爆症**げんぱくしゅうじ**

原爆の被災によって生じた健康障害の総称で、熱線、爆風による熱傷や放射能を直接多量に受けたために起こる障害。造血臓器、生殖腺、内臓などに疾患が起き、免疫力の低下や白血病（血液ガン）などの各種ガンにかかりやすい。被災から数十年たつて発症することも少なくない。

憲兵**けんべい**

陸軍の軍事警察。陸軍大臣の管轄で、憲兵隊本部（東京）によって統括された。主に軍事警察を掌るが、治安維持のために、軍、政、民間を問わず、絶大な強制力をもっていた。

工廠**こうしょう**

武器・弾薬をはじめ軍需品の開発・製造・修理・貯蔵・支給するための軍直轄の工場・施設のこと。陸軍造兵廠や海軍工廠などの総称。

高等学校**こうとうがっこう**

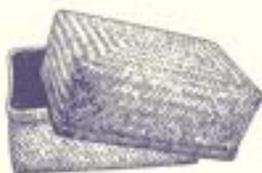
男子の高等教育を行う修業期間三年の学校。官立（国立）の第一高等学校（二高、東京）、二高（仙台）、三高（京都）、四高（金沢）、五高（熊本）、六高（岡山）、七高（鹿児島）、八高（名古屋）のいわゆるナンバースクールの他、各地の名を冠した官立（公立）や私立の高等学校があった。昭和三年の学制改革により廃止され、多くは新制大学の教養部等の母体となった。

高等女学校**こうとうじょがっこう**

旧制の女子中等教育機関。小学校修了後の修業年限は基本五年で、女子に必要な普通教育を施す学校であった。男子のための中学校（旧制）に相当する。本科卒業後、専門教育のための専攻科（修業年限一年または二年）、高等科（同二年または三年）も設置された。

行李**りょう**

竹や柳・藤などで編んだ取納具。衣類や身の回り品を取納あるいは旅行用の荷物入れに使われた。柳で編んだ柳行李や竹を編んだ上に紙を貼り柿渋を塗った渋張（しぶはり）行李など。



また、陸軍の用語で「行李」は戦場に携行する弾薬、糧秣、その他を運ぶ追隨部隊の名称。

国籍条項**こくせきじょうこう**

医療保険や住宅その他、社会福祉・社会保障

の権利において「国民をその対象とする」とする条項。戦時中、朝鮮や台湾などの住民も「皇国民」として戸籍が作られたが、外地である朝鮮・台湾と内地である日本との戸籍の移動は、婚姻や養子縁組を除いて禁止されていたため、朝鮮・台湾から渡って来たいた人たちは戦後、戸籍に基づいて「外国人」とされた。日本政府は「国民」を「日本国籍保持者」と見なし、旧植民地出身者に特別な配慮は行わなかった。

国防婦人会**こくぼうふじんかい**

日中戦争前に女性のボランティア組織「大日本国防婦人会」が大阪で結成され、全国に広まっていった。白い割烹着をトレードマークに、出征兵士の見送りや戦死者の遺骨の出迎えなどの活動を行った。昭和十七（一九四二）年に各地の国防婦人会、愛国婦人会などが統合され、「大日本婦人会」として二十歳以上の女性は強制的に加入させられた。

国民徴用令**こくみんちようじょうれい**

国家総動員法に基づいて昭和十四（一九三九）七月に制定。国家による強制的な労働力動員政策。当初は申告義務のある職種・技術者を対象していたが、戦争拡大により昭和十八（一九四三）年の改正で年齢層が広げられ、すべての職種の技能・技術者が対象になった。

国民学校**こくみんがっこう**

昭和十六（一九四一）年、従来の小学校の名

称を国民学校と改め、内容も時代に即応した初等教育が行われた。軍国主義的色彩が強く、児童は小国民とよばれた。

古(参)兵 [いにしへのへい]
古年次兵。二年以上隊にいる兵士。

在郷軍人 [ざいこうぐんじん]

通常は一般の国民として生活し、招集がかかるが戦場に向かうことになる人のこと。満二〇歳から四〇歳(昭和十八年からは満四五歳)までのすべての男性は兵役の義務を負っていた。「在郷軍人会」として、各地域での防火訓練や竹槍訓練などの指導も行った。

GHQ

日本占領の任務を担当した連合国軍最高司令官総司令部 (General Head Quarters, Supreme Commander Allied Powers) の略称。日本政府や各機関に対して絶対権限を持ち、昭和二六(一九五二)年締結の対日講和条約(サンフランシスコ条約)が発効される昭和二七年四月二八日まで占領政策を遂行した。最高司令官(SCAP)はダグラス・マッカーサー(昭和二六年四月解任、後任はマシュー・リッジウェイ)。

志願(兵) [しがん(へい)]

一般の兵役義務年齢の二〇歳より以前に希望して軍隊に入ること。

陸軍の幹部候補生は、旧制中学校卒業と同時に、本人が望めば十七歳で軍隊に入ることが

できた。少年戦車兵、少年通信兵、海軍の少年航空兵(予科練)、特別年少兵などは、十五歳以上(昭和十八年以後は十四歳)から入学することができた。

「特別志願兵」は、戸籍法の適用を受けない帝国臣民(朝鮮、台湾)の男子。特別志願将校(特志将校)は、予備役・後備役の陸軍将校が志願して再度、現役将校に戻ることに。

師範学校 [しはんがく]

小学校教員の養成を目的とする学校。高等小学校卒業後の男子六年間、女子は四年間。または中学卒業後の男子二年間、高等女学校卒業後の女子一年間。昭和二二(一九四七)年に廃止され、教員養成は学芸大学、教育大学などに移された。

白紙召集 [しろがみしよじゅう]

昭和十四(一九三九)年七月公布の国民徴用令により、国は国民に対して徴用命令で強制的に職場を転換させることができた。応じない者には国家総動員法により一年以下の懲役または千円以下の罰金が課せられた。徴用者に渡される命令書が白かったことから、徴兵の「赤紙」に対して「白紙召集」と呼ばれた。

尺貫法 [しゃっかんぽう]

明治四二年の度量衡法で定められた日本の単位系。

一里、三六町、約四キロメートル
一町、六〇間、三六〇尺、約一〇九メートル

一間、六尺、約一・八メートル
一尺、一〇寸、10/33メートル(三〇・〇三cm)
一斗、一〇升、約十八リットル
一升、一〇合、約一・八リットル
一合、一〇勺、約〇・一八リットル
一貫、一〇〇匁、三・七五グラム
一匁、三・七五グラム

出征 [しゅつせい]

軍隊に入って戦争に行くこと。

焼夷弾 [しょういだん]

目標を焼き払うため焼夷剤(発火性の薬剤)を装填した爆弾や砲弾。

米軍のM69油脂焼夷弾は日本の木造家屋を効率的に焼き払うために開発された。三八発のM69焼夷弾をまとめて内蔵した集束焼夷弾が、上空七〇〇m程度で分離し、一斉に地上へ降り注ぐと、それぞれの筒が数十mの火花を吹き出し、あたりを焼きつくした。

召集 [しゅうじ]

必要に応じて兵役の年齢に達した者を軍隊に呼び集めること。

充員召集 II 部隊の要員を満たすために、在郷軍人を召集すること。陸軍は動員令、海軍は充員令、解除は復員令によって行われた。

臨時召集 II 臨時に在郷軍人や帰休兵、予備役を召集すること。

教育召集 II 陸軍が補充兵の教育のため二〇日以内に召集して教育する制度。
勤務演習召集 (演習召集) II 予備役と後備役

を演習のため召集すること。一回の召集日数は陸軍三五日、海軍七〇日以内。

防衛召集は昭和十七年の陸軍省令により、在郷軍人を必要な場合のみ召集する制度。防空召集と警備召集があった。

召集令状「しょうしゅうれいじょう」

軍隊に呼び集めるために出された命令書。紙の色が赤かったことから「赤紙」とよばれた。役場の兵事係により、本人や家族に渡され、本人が持つて入営したため、現存するものは少ない。

初年兵「しよねんへい」

入隊して一年以内の兵士。陸軍では初年兵教育を同じ内務班の古参兵が行った。

尋常小学校「じんじょうしょうがっこう」

明治から戦前までの義務教育。明治四十一年（一九〇七）年の小学校令改正によって、それまでの四年制から、六年制に改正された。

尋常高等小学校「じんじょうこうとうしょうがっこう」

尋常小学校（初等科）につぐ高等科の二年間。高等小学校は義務教育でなかったため授業料を徴収していた。実質的には、尋常小学校と高等小学校は合わさっていた。

連駐軍「しんちゅうぐん」

終戦に伴うポツダム宣言を執行するために日本で占領政策を実施した連合国軍機関。アメリカ合衆国占領軍（USOJ）の他、イギ

リス、オーストラリアのなどのイギリス連邦占領軍（BPOJ）で構成されていた。

八月二十八日、米陸軍一五〇名が横浜に初上陸し、連合国軍本部を設置した。イギリス連邦占領軍は広島など中国・四国地方を担当し、残る都道府県はアメリカ占領軍が担当した。

長崎には九月十六日先遣隊五〇〇人が出島岸壁から上陸、アメリカ第八海兵師団が出島の長崎税関庁舎を接收し、長崎の連駐軍本部となった。

スフ

人造綿糸（人絹）、ステープル・ファイバーの略。昭和十三（一九三八）年内地向け綿製品はほとんどスフとなったが、その品質はひどく悪いものだった。

青年学校「せいねんがっこう」

義務教育終了後、兵役につくまでの地域教育機関。働きながら学ぶことのできる学校で、中学校などに進学しない十二歳から十九歳の男女が所属した。授業料は無料で小学校や工場などと併設されていた。昭和十四年に男子のみ義務制となり、徴兵年齢まで軍隊教育を行った。昭和二十二年廃止。

戦死「せんじ」

軍人や軍属が戦闘によって死亡すること。通常は平時の死亡や、戦時でも訓練中の事故・病死（戦病死）などは含まれないが、その定義は国や時代などによって異なる。

戦死公報「せんじこうほう」

出征した兵士の家族に届けられる国からの戦死の通知。通常、役場などを通じて届けられた。戦争末期には戦死者が増え、確認が難しくなったこともあり、戦死から数年もたって届けられることもあった。

専売局「せんばいきよく」

一八九八年（明治三十一年）に設置された大蔵省（現在の財務省）の外局。食塩・樟腦・煙草・アルコールなどの専売業務を担当した。一九四九年（昭和二十四年）大蔵省から分離独立して、たばこ・塩・樟腦の専売業務を担う特殊法人日本専売公社となった。

一九八五年（昭和六〇年）の日本たばこ産業株式会社（JTI）の設立により専売公社は解散した。

戦略爆撃調査団「せんりやくくげきさつちやうさだん」

USSBS: United States Strategic Bombing Survey（米国戦略爆撃調査団）
アメリカ軍による戦略爆撃（空爆や艦砲射撃）の効果を検証するための機関。第二次世界大戦のヨーロッパ戦域と太平洋戦域での空襲の効果調査し、空軍力の重要性和将来性を分析して報告書にまとめた。

太平洋戦争要約報告のなかで、日本は一九四五年十月末までに、原子爆弾が投下されていなくても降伏していたであろうと結論している。

創氏改名【そうしかいめい】

すべての朝鮮人に日本風の家族名として自分の所属する家を示す「氏」を創り届け出ようというもの。昭和十四（一九三九）年十一月、改正朝鮮總督府制令が發布、翌年二月に施行された。

男系血統を重視する朝鮮の家族制度に対し、日本の家（同一戸籍の家族集団）制度を持ち込み、その称号の「氏」を新たに創設（創氏）、公用名を従来の姓名から日本式の氏名に変更（改名）させた。届け出なかった人は、戸主の先祖伝来の男系の朝鮮名をそのまま「氏」とさせられた。法律上は届出となっていないが、実際には様々な強制が行われた。

造兵器【ぞうへいしよ】

陸軍造兵器廠。兵器行政本部のもとにおかれた陸軍内部の製造部門。

兵器の開発、生産、保管、修理などを一括管理していた、いわゆる兵器工場だが、武器・弾薬ばかりでなく、工具や食器まで、陸軍で使用するのはほとんど全て「兵器」とよばれた。造兵器で生産された「兵器」は補給廠を通じて各師団へ卸された。

疎開【そかい】

空襲の恐れのある地域で被害を増大させないように、集中している住民や建物を地方へ分散させること。

大東亜共栄圏【だいたうあきょうえいけん】
イギリス・アメリカを中心とする欧米列強国

の植民地支配から東・東南アジアを解放し、共存共栄の国際秩序をアジアに建設しようという、日本が戦時の大義名分として掲げたスローガン。

一九四三年には大東亜共栄圏内各国の首脳を東京に集め、大東亜会議を開催し、大東亜宣言が採択された。「東亜」はアジア東部の意味。

大東亜戦争【だいたうあせんそう】

一九三七年からの日中戦争と一九四一年からの太平洋戦争の当時の公式名称。

大発【だいはいはつ】

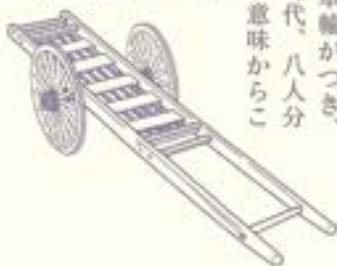
大発動機艇の略。船首が開き兵員（約六〇名）や戦車車両などを揚陸させるための上陸用舟艇。小型の「小発」（兵員約二〇名）もあった。

大（代）八車【だいはいはちぐるま】

大型の運搬用荷車。二・五m程の板の中央に木製の車輪が付き、人が引いた。江戸時代、八人分の仕事をするとという意味からこの名がついた。大八

車を引いて荷物を運ぶ人を車力という。

一方、ゴムタイヤで自転車などで引けるようになってきているのが「リヤカー」。



代用食【だいうじょうじよく】

戦争激化に伴う物資不足により、米の配給が遅れたり、無かったりという事態になったため、主食にかわる食事が奨励された。昭和十四（一九三九）年の戦時食糧充実運動の開始により米・麦に代わって穀粉・トウモロコシ・高粱（もちりこし）が配給された。さらに食糧事情が悪化すると、イモのつるや葉、カボチャの種まで代用食とされた。「おから（餛飩頭）」「じんぐりパン」、稲藁の粉末を小麦粉や海藻などと混ぜてつくる「パン」や「うどん」、食べられる野草をませた「草だんご」などがあつたが、代用食でさえ、十分に食べることができない人も多かった。

代用品【だいうじょうひん】

金属や皮革など不足している材料に代わって、陶器製の湯たんば、竹製スプーン、布製バケツなど様々なものが代用品として作られた。戦争末期には、陶器製地雷や陶器製手榴弾など代用品による武器さえあつた。

タコツボ

戦争で歩兵が砲撃や銃撃から身を守るために使う穴や溝（塹壕・日本陸軍では散兵壕）で一人用の小さなものをタコツボ（蛸壺）と呼んだ。

中学校【ちゅうがく】

旧制中学校。義務教育（尋常小学校）の六年間をおえた後の五年間の男子中等教育。昭和二二（一九四七）年の学校教育法により、旧

制度の高等小学校、中学校、高等女学校、実業学校のはじめの三年に相当する部分を吸収して修業年限三年の新制中学校が設置された。

徴兵検査【ちようへいけんさ】

国民を軍隊にかり出すために行われた身体検査のこと。満二〇歳（一九四三年からは満十九歳）に達した男子は総べて受けなければならなかった。

四月から七月に全国的に行われ、地域の集会所や小学校で検査が行われた。検査に合格した者は体格の程度に応じて甲種、乙（第一、第二）種、丙種、丁種、戊種とランク付けされた。徴兵検査で兵役に適すると判定された一部が、現役兵として翌年の一月十日に各連隊に入営し、他の大多数は補充兵（在郷軍人）として待機させられ、兵力が不足すると、「赤紙」と呼ばれた召集令状により、軍隊にかり出された。



徴兵検査

（写真【21世紀への遺産 - 福岡市隊員被服者の食】より）

徴用【ちようよう】

国家が国民や占領地住民に対して強制的に一定の業務につかせること。

昭和十四（一九三九）年の国民徴用令によって戦争終結まで行われた。また施設や船舶等を徴発することも徴用という。

帝国大学【ていこくだいがく】

旧制の国立総合大学。「帝大」と略称された。明治十（一八七七）年創立の東京大学が明治十九（一八八六）年の帝国大学令により帝国大学となり、明治三〇年の京都帝国大学の設立に伴い東京帝国大学と改称。以降、東北、九州、北海道、京城（現ソウル）、台北（現台北）、大阪、名古屋の各帝国大学（七帝大）が設けられた。修業期間は三年（医科は四年）。

戸板【といた】

病人やけが人を運ぶために、はずして使った両戸のこと。

灯火管制【とうかかんせい】

昭和十二（一九三七）年の防空法により、国民は灯火を制限する義務を負わされ、夜間の空襲の場合に目標とならないよう明りを消したり、光が外にもれないように黒い布で覆ったりしなければならなかった。

統制品【とうせいひん】

国が生産者から安い金額で買取り、それを消費者である国民に均等に配布するという一種の社会主義のような経済（統制経済）の対象

となった物品。

昭和十四（一九三九）年十月に国家総動員法に基づく物価統制令が施行され、翌年に米、味噌、醤油、塩、砂糖、マッチなど十品目の配給制度が始まった。太平洋戦争突入までの間に次々と拡充されていった。配給切符は一人あたり何点と決めて配布され、お金をいくら持っていないでも統制品は買えないため、ひそかに現金で取引する「闇市」が現れた。

東洋工業【とうようこうぎょう】

一九二〇年東洋コルク工業株式会社として広島に発足。後に東洋工業株式会社と改称し、三輪トラックの生産を開始した。一九三八年の「軍需工業動員法」の施行により陸海軍共同管理の軍需工場となった。爆心地から遠かったこともあって比較的被害が少なく、原子爆弾投下後は、臨時措置として広島県庁の全機構が設置され、戦後しばらくの間、県行政の中心となっていた。現在のMAZDA（マツダ）の前身。

特攻【とくこう】

自らを犠牲とする「特別攻撃」の略称。

太平洋戦争後期の消耗戦で悪化する戦況や戦果を一転させようと、苦肉の策として昭和十九年十月発動した体当たり攻撃作戦。

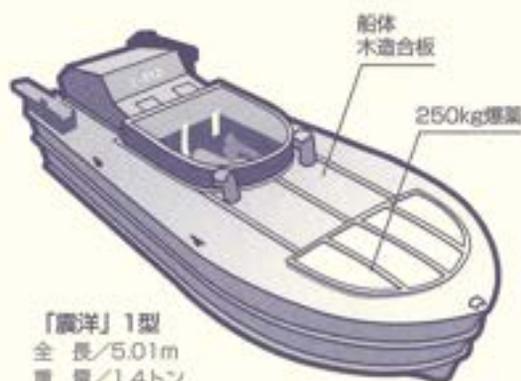
飛行機に爆装して体当たりする「航空特攻」、特殊滑艇や人間魚雷などの「海上特攻」などがあった。その代表が神風攻撃隊（神風）。当初は「零戦」等の新鋭機を投入していたが、沖縄戦末期からは旧型機・練習機まで使用

海軍の特攻兵器

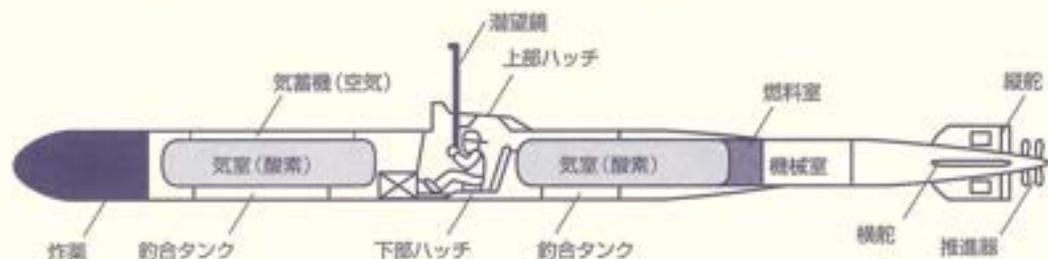


「桜花」11型
全長/6.07m
全幅/5.12m
全高/1.16m
目重/440kg
爆薬搭載量/1.2トン

最高速度/645km/h
発動機/四式一号
二〇型ロケット
(燃焼時間9秒)
乗員数/1名



「震洋」1型
全長/5.01m
重量/1.4トン
爆薬搭載量/250kg
速度/23ノット
発動機/67馬力エンジン
乗員数/1名



「回天」1型
全長/14.75m
直径/1.0m
全重/8.3トン
爆薬搭載量/1.55トン

最高速度/30ノット
動力/93式酸素魚雷3型
乗員数/1名

「ながい たかし」
一九〇八年—一九五一年 医学博士
爆心地から七〇〇メートルの長崎医大で被爆。右側頭動脈切断という重傷を負いながら、布を巻くのみで被爆者の救護に当たった。亡くなるまでの三年あまりを過ごした庵は「己の如く人を愛せよ」の意から如己堂と名付けられた。著書に「長崎の鐘」「亡びぬも

「なりぐみ」
一九四〇年の内務省訓令に基づいて町内会などの下に設けられた末端の地域組織。戦時体制の国民生活の基盤の一つで、配給物資の受給、物資の供出、空襲による避難などを一体となして行った。その一方で思想統制のための「相互監視」の意味合いもあった。

「特攻兵器」
大戦末期の特攻作戦に使用された体当たり攻撃兵器。戦艦などの通常兵器に爆弾を搭載する方法だけでなく、体当たり攻撃専用の兵器が開発された。急造された「剣」(昭和二〇年三月生産開始、胴体は鋼管・ブリキ、翼とプロペラは木製、水平尾翼は紙製、車輪は離陸後放棄)や有人ミサイル「桜花」。水上・水中では、魚雷を一人乗りに改造した人間魚雷「回天」、ベニヤ板製モーターボートに二五〇キロ爆薬を装備した「震洋」(陸軍の秘匿名「マルレ」)が特攻専用兵器として製造された。

し、さらに特攻専用兵器も急造された。

のを「この子を残して」など多数。

二次被爆【じじくぱく】

原爆炸裂後、被災者の救援活動などのため入市し、黒い雨や誘導放射能などにより被曝したり、被災地域より避難してきた被爆者の汚染された衣類や頭髮に触れて長時間放射能にさらされたために、体に異常を起こす二次放射能障害のこと。広島・長崎の被爆では、直接に空爆の攻撃を受けたわけではない「間接被曝」の場合も「被爆」という。

似島【にのしま】

広島市宇品沖合約4kmにある周囲約16kmの島。陸軍の検疫所や弾薬庫など軍部広島島の重要な軍事施設が置かれていた。

曉部隊によって、宇品の海岸に逃れてきた被爆者の収容にあたり、臨時野戦病院が開設された八月六日から二五日の間に収容された人は一万人を超え、うち三〇〇〇〜四〇〇〇人が死亡したといわれる。

入營【にゆうえい】

兵士となって兵營（兵隊の居住する建物とその区域）に入ること。入隊。

配給【はいきゅう】

国家が特定の目的のために物資の配分について、流通や配分方法を規制する制度。

昭和十四（一九三九）年の米の配給統制法公布により、配給通帳や配給券（配給キップ）と引き換えでなければ米を買うことができな

くなった（配給割当販売）。その後昭和十九年の「決戦非常措置要項」の策定までにはほとんどの食品、衣料品が配給制となった。

非戦闘員【ひせんとういん】

戦闘に直接加わらない一般の人や、兵員ではあっても戦闘以外の通信や輸送、医療などをする人のこと。

被爆・被曝【ひばく】

被爆は（核兵器に限らず）爆撃によって被災すること。被曝は人体が放射線にさらされること。

「曝」が常用漢字にないことから「被ばく」と書かれることが多い。「被ばく」と表記した場合は「被曝」を意味する。広島・長崎の原子爆弾による被曝の場合は「被曝」の意味も含まれている。

被爆者【ひばくしゃ】

平成六年の原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律（被爆者援護法）では次のように定められている。

第一章 総則

（被爆者）

第一条 この法律において「被爆者」とは、次の各号のいずれかに該当する者であつて、被爆者健康手帳の交付を受けたものをいう。

一 原子爆弾が投下された際当時の広島市若しくは長崎市の区域内又は政令で定めるこれらに隣接する区域内に在つた者

二 原子爆弾が投下された時から起算して政

令で定める期間内に前号に規定する区域のうちで政令で定める区域内に在つた者

三 前二号に掲げる者のほか、原子爆弾が投下された際又はその後において、身体に原子爆弾の放射能の影響を受けるような事情の下にあった者

四 前三号に掲げる者が当該各号に規定する事由に該当した当時その者の胎児であつた者

被爆者援護法【ひばくしゃえんごほう】

昭和三二（一九五七）年三月の「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」（原爆医療法）と昭和四三（一九六八）年三月の「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」（原爆特別措置法）の「原爆二法」に代わり、平成六（一九九四）年十二月「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」（原爆被爆者援護法）が成立した。被爆者援護法は、基本的には原爆二法を一本化し、新たに特別葬祭給付金の支給など被爆者の総合的な援護対策を実施する法律として制定されたもの。認定されれば被爆者手帳を交付され、医療費全額支給のほか、症状などに応じ医療特別手当や健康管理手当などが支払われる。また、一定の条件を満たす被爆者に特別葬祭給付金を支給することが新たに定められた。

被爆者健康手帳【ひばくしゃけんこうてちょう】

「被爆手帳」「原爆手帳」などといわれる原子爆弾の被爆者であることを示す証明書。保険証とともに医療機関へ提示すると、無料受診、投薬、入院などができる。

手帳の給付に該当するのは、原子爆弾が投下された際、指定の区域で直接被爆した人とその人の胎児。投下されてから二週間以内に、救援活動、親族探しなどのために、市内に立ち入った人とその人の胎児。その他、多数の死体処理、被爆者の援護などに従事し、身体に放射線の影響を受けるような事情にあった人とその胎児となっているが、指定区域や在外被爆者への給付条件などで問題も生じている。三年ごとの更新は、一九九九年を最後に廃止された。

被爆直後の写真【ひばくちよ町のしゃんた】

松重美人（まつしげ よしと）

被爆当日の広島を撮影した唯一の報道写真家。中国新聞写真部に所属し、中国軍管区司令部の報道班員も兼ねた。翠町の自宅で被爆。爆心地に近い市街地での被災の様子を撮った写真は、松重のものしか残されていない。

山端庸介（やまはた ようすけ）

被爆直後の長崎を撮影した従軍写真家。陸軍省西部報道部（福岡市）の指令で、同じ報道部員であった作家の東潤、画家の山田栄二らと被爆直後の八月十日に長崎市内に入り、その悲惨な状況を撮影した。終戦後、写真の一部が新聞に掲載されたが、九月以降はGHQにより、原爆に関するあらゆる報道は規制された。

被服廠【ひふくしやう】

陸軍の工場である造兵廠のなかで、衣料関係の製造・管理部門。



ボーイング B29 スーパーフォートレス

B29

ボーイング B29 スーパーフォートレス（超空の要塞）。全幅四三・〇五m、全長三〇・一七m、二二〇〇馬力エンジン四基という当時世界最大の戦略爆撃機。

一九四四年五月から運用開始。最大九トンもの爆弾を搭載し、最大速度、時速五七六km、航続距離六六〇〇km（満載時）でサイパン・テニアン・グアムの基地から往復十二〜十五時間で日本本土爆撃に向かった。各型総生産機数は三、九七〇機。昭和十九年六月十五日の北九州初空襲以来、終戦までに B29 によって日本本土に落とされた爆弾は一四七、〇〇〇トンにのぼるといわれている。

復員【ふくいん】

軍人・軍属が帰国すること。

戦争終結時には約三三五万人の軍人・軍属が海外にいた。同じく約三〇〇万人の民間人の帰国のことは「引揚げ」といった。多くの復員・引揚げは昭和二三年まで続いたが、旧ソ連によるシベリア等への抑留者は、なかなか帰国が許されず、最後の帰国が終了したのは昭和三十一年だった。

兵役【へいえき】

国民が義務として兵士となり、軍務につかねばならないこと。

志願兵や義勇兵など自由意思で募集に応じる自由兵役（募兵制度）と徴兵や民兵などのように国家が強制的に軍務に服させる強制兵役（徴兵制度）に大別される。

防空演習【ぼうくうえんしゅうぎ】

空襲を想定し、被害を最小限にいとめるためにおこなった訓練。

空襲に備えての防空組織として警防団が設けられ、市民は待避訓練やパケツリレーなどの消火訓練に駆り出された。灯火管制を含む本格的な防空演習は昭和初期からすでに行われていた。

防空監視所【ぼうくうかんしじょ】

または防空監視哨。敵飛行機の進入を警戒するための施設。

昭和十二年の防空法施行により、ビルの屋上や山の上などに作られた。軍の施設ばかりで

なく、警察や民間の自主的なものもあり、防護団員が交替で警戒にあたった。

防空壕【ぼくうぐいし】

空襲の被害を避けるために設けられた穴や地下室のこと。

横穴式防空壕（全長三〇mを一単位、取客人員は一〇mにつき三〇人）や、横穴式のできない平地では避難壕、公共待避所などが全国に数多く作られた。

ボツダム宣言【せんげん】

一九四五年七月二六日に、アメリカ、イギリス、中華民国の三首脳の名で発表された対日共同宣言。



防空壕
〔写真「21世紀への道程 - 福岡市原爆被害者の会」より〕

ベルリン郊外のボツダムでトルーマン、チャーチル（後にアトリー）、スターリンによって開かれた会談の結果を、蒋介石の同意で発表された。十三条から成る降伏勧告の宣言で、宣言を発した各国の名をとって「米英支ソ四国共同宣言」ともいう。会談の席上で、アメリカ合衆国大統領トルーマンに原子爆弾の完成が伝えられた。十三条の最後には「この勧告が受け容れられない場合、日本は迅速かつ完全なる壊滅あるのみ」と声明している。そして日本政府は当初これを黙殺した。

枕崎台風【まくらざきたいふう】

一九四五年九月十七日、鹿児島県枕崎市付近に上陸して日本を縦断した、室戸台風・伊勢湾台風と並ぶ昭和の三大台風のひとつ。特に広島県では死者・行方不明者合わせて二千人を超えるなど、原爆の惨禍に追い打ちをかけた。さらに翌十月十日には、鹿児島県阿久根付近に上陸した阿久根台風が同様のコースをたどり、広島市内の多くの橋が流失した。

三菱造船所【みつびしぞうせんじょ】

三菱重工業（株）長崎造船所。軍の造船所である海軍工廠に対して、民間でも軍の命令によって軍艦の造船・修理をおこなった。当時、世界最大の戦艦であった「武蔵」もここで造られたが、戦局が悪化するにつれ、特攻兵器の製作へとうつっていった。従業員は一般からの徴用や学徒動員、朝鮮人など合わせて約四万人にもほばっていた。

三菱兵器【みつびしへいき】

三菱重工業（株）長崎兵器製作所。

大正六（一九一七）年、日本唯一の民間魚雷製作工場として創設され、茂里町に工場、西彼杵郡長与町堂崎に発射試験場が設けられた。大戦中の魚雷生産では全国の八割を占めていた。

原爆投下時の大橋工場・茂里町工場など三菱長崎兵器製作所全体の従業員数は女子挺身隊、学徒報国隊を含め、一七、七九三人。そのうち、原爆による死亡者は二、二七三人、負傷者は五、六七九人であった。また、住吉トンネル工場（地下工場）は三菱兵器の疎開工場として大橋工場より生産設備が運び込まれ、動員学徒、挺身隊員等約一、八〇〇人が従事していたが、トンネル内は比較的被害少なかったため、負傷して避難してきた人々に対して救護・救済活動が行われた。

一九四五年十一月、長崎三菱兵器製作所は正式に閉鎖された後、翌年「長崎精機製作所」として再建、民需品の生産を始めた。一九五一年には関連各社に吸収され、工場は閉鎖されたが、技術を引き継いだ三菱長崎造船所により一九五六年から魚雷の生産を開始している。

木炭車【もくたんしゃ】

木炭を乾留（蒸し焼き）にして発生する一般化炭素と水素（水性ガス）を燃料にした自動車。一般のガソリンエンジンから比較的簡単に改造でき、バスなどで使用されたが、エンジンの出力は極めて低かった。

木銃「もくじゅう」

歩兵銃（小銃）に銃剣を取り付けた長さをもとして作られた木製の訓練用武器。学校での軍事教練や銃剣術（銃剣道）で使用された。

予科練「よかれん」

海軍飛行予科練習生の略。

海軍の航空戦力を高めるため、中堅幹部育成の目的で十四歳以上二十歳未満を対象として昭和五（一九三〇）年、横須賀に誕生。増員により體ヶ浦に移転し、戦争拡大とともに全国十数カ所に設置された。

旧制中学校四年一学期の学力を有する「甲種」、高等小学校修了以上の「乙種」、海軍の下士官から選抜された「丙種」、乙種の中から一定の資格のある者を採用した「特乙」の四種類がある。戦局の悪化で燃料・航空機が不足し、昭和二〇年六月一日をもって飛行予科練習生教育は中止となった。練習生は飛行兵として志願しながら、水上・水中特攻や本土決戦に備えた陸上勤務等、様々な部隊に配置された。

四斗樽「よんどたる」

木の板を合わせ、竹の軸で縛った樽。日本酒や醤油の醸造・販売容器。四斗は72リットル

ラジオゾンデ

原爆の熱線温度や爆圧などを測定し、送信するために、原爆炸裂の直前に、高空を飛ぶ随伴機から投下された無線装置。広島、長崎でそれぞれ三個のゾンデが投下され、グアム島

の通信司令部はこの通信で原爆の成功を知った。落下傘（パラシュート）につけられていたため、「原爆には落下傘がついていた」という誤解が生まれた。



ラジオゾンデ



朝日新聞
広島へ敵新型爆弾
昂少数機で来襲攻撃
相繼ぐ被害 詳細は目下調査中

落下傘つきを伝える新聞

（写真「21世紀への遺言 - 福岡市原爆被害者の会」より）

この証言集の参考資料・脚注および各数値については、以下の書籍、webサイトを参照しています。

主な書籍

広島原爆被災誌 全5巻 (1971年 広島市) 長崎原爆被災誌 全5巻 (1977年 長崎市)

21世紀への遺言 (1995年 福岡市原爆被害者の会) 他

主なwebサイト

広島平和記念資料館 <http://hpmmuseum.jp/> ながさきの平和 <https://nagasakipeace.jp>

平和記念展示資料館 (総務省委託) <https://www.heiwakinen.go.jp/>

NHK 戦争証言アーカイブス <https://www.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/>

アメリカ国立公文書記録管理庁 NATIONAL ARCHIVES <https://www.archives.gov/veterans>

厚生労働省 原子爆弾被害者対策 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/burya/kenkou_iryou/kenkou/genbaku/index.html

国土交通省 国土地理院 <http://www.gsi.go.jp/tizu-kutyu.html>

他、各新聞社及び関連企業webサイト

当時の服装

昭和十五年の国民服令によって男子はカーキ色（国防色）の国民服上衣、中衣及び帽子等が制定され、女子は昭和十七年、婦人標準服として「もんぺ」の着用が半ば強制された。

防空すきん
空襲時に頭部や首筋を守るために、各家庭で衣類を再利用して作られた。

名札

名前と血液型を書いていた

もんぺ

地下たび

雑囊（ざつのう）
必要なものを入れた布製バッグ

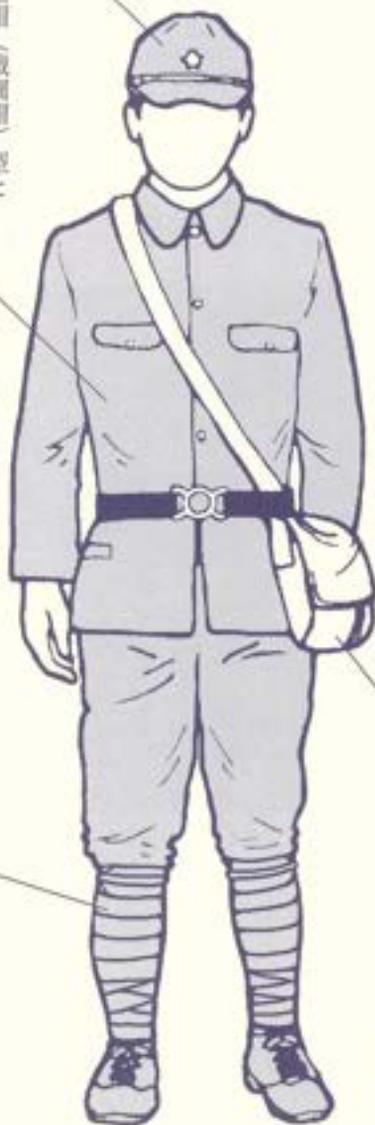
帽子

陸軍の略帽（戦国帽）型と両側に折り返しが付いた烏帽子（えぼし）型がある

国民服

陸軍の軍服に準じ、甲（折襟）乙（開襟）がある

ゲートル



あとがき

被爆体験証言集「つたえてください あしたへ……」は今年も無事に28集を発刊することができました。被爆の実相を後世に残すという組合員の思いと、その思いに添えて言葉にするのも辛い被爆体験を話してくれた証言者、携わったスタッフと関係者のみなさま、全員の使命感の結晶です。

今年度、エフコープは設立四〇周年を迎えました。その歴史の中には、様々な社会情勢の移り変わりもありました。二〇二二年二月にはロシアによるウクライナ侵攻がはじまり、軍人だけではなく、多くの民間人も犠牲となっています。国外への避難民も八〇〇万人を上回ったといわれ、世界経済にも大きな影響を及ぼしています。

被爆体験証言集「つたえてください あしたへ……」は、被爆の悲惨さ、戦争の愚かさを後世に伝えなければならぬという被爆体験者の思いが詰まったものです。証言していた

多く被爆者が減少し、この聞き書き活動の継続が年々困難を増しているのも事実です。

昨年十月には、第1集発刊にご尽力いただき、その後も多大なるご協力をいただきました漫画家の西山進さんが九四歳でご逝去されました。改めて哀悼の意を捧げるとともに、わたしたちはこれからも西山さんの思いをつなぎ、平和な未来を創造できるように、この証言集を多くの方に読んでいただけるように努め、被爆の実相を伝えていきます。

最後になりましたが、発刊にあたりご協力いただきました福岡県原爆被害者団体協議会をはじめ、各原爆被害者の会の皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

二〇二三年六月

エフコープ「聞き書き」活動参加者一同

■被爆体験証言集 WEB ブック

エフコープのホームページでは、過去に発刊したすべての証言集を閲覧できます。

<http://www.fcoop.or.jp/about/us/library/tsutaete.html>



■被爆体験証言 朗読動画

被爆の実相を次世代へ伝えていくとりくみの一つとして、さらに多くの人に語り継いでほしいという願いを込めて、被爆体験証言を朗読シナリオにしています。そして、そのシナリオを作成している「たんぼぼのわたげ」と、学生ボランティアとして聞き書き活動にも参加していただいた筑紫女学園大学にご協力いただき、学生たちにも朗読していただきました。

「たんぼぼのわたげ」と筑紫女学園大学の学生による
シナリオ朗読 (Youtube 動画 再生時間 32 分)

<https://www.youtube.com/watch?v=yZhLZCLWNNM&t=1s>



筑紫女学園大学の学生 6 名によるシナリオ朗読
(Youtube 動画 再生時間 19 分)

https://www.youtube.com/watch?v=w005hDEH_xl



■エフコープ 平和・国際交流分野ページ

被爆体験証言集のほか、平和の尊さを伝える「平和展」やオンラインクイズ「知って学ぼう！ 平和クイズ」など、さまざまな活動の紹介をしています。

<http://www.fcoop.or.jp/action/heiwa/index.html>



被爆体験証言集「つたえてください あしたへ……」 第28集をお読みいただいたみなさまへ

私たちエフコープ組合員が、被爆体験者の方々から直接お話をお聞きして発行してきました「つたえてください あしたへ……」も今年で第28集となりました。

私たちは、「平和の大切さ」「命の尊さ」を次世代へ語り継ぐこと、世代を超えて「想い」を繋ぐことが大切だと考えています。

この証言集の作成にあたっては、お聞きした証言内容を出来る限り正確に伝えるため、方言はそのままで、また、現在では不適當と思われる言葉も、他に代わる用語が見つからない場合はそのまま表記しております。

「ご感想」「平和への想い」をお寄せください

この被爆体験証言集を読んでいただいたみなさんの「想い」を聞かせていただけたら…と思っています。

お寄せいただいた「感想」「平和への想い」は、ご本人様に確認のうえ、今後発行する被爆体験証言集のほか、エフコープ平和活動関連資料に掲載させていただく場合もありますのでご了承ください。また、ご記入の個人情報に関しては、上記のご連絡目的以外に使用しないことをお約束いたします。

【証言集を読んでの感想入力フォーム】

●下記のリンクまたは二次元コードから感想をご入力ください。

<https://forms.gle/3bBoj3uvGRbbAhxe9>



■エフコープでは、広島・長崎での被爆体験を聞かせていただける方を募集しています。お話しいただける方やお知り合いの方がいましたら、エフコープ組合員活動部までご連絡をお待ちしています。

■エフコープ生活協同組合 組合員活動部 福岡県糟屋郡篠栗町中央 1-8-3
TEL(092)947-9003 FAX(092)947-9192



【第28集刊行参加メンバー】

森尾 優子 (北九州市)
松嶋 幹恵 (北九州市)
谷口 純子 (北九州市)
山下 泰子 (北九州市)
中原 沙耶花 (北九州市)
高崎 弘子 (北九州市)
村上 とよ子 (行橋市)
大庭 実鈴 (水巻町)
八坂 志寿 (遠賀町)
小林 節子 (嘉麻市)
高木 ミドリ (田川市)
松尾 和子 (宗像市)
斎藤 マチ子 (古賀市)
木村 桂子 (福岡市)
柳田 さつき (福岡市)

瀧美 喜久代 (福岡市)
久保 千景 (福岡市)
平尾 映子 (福岡市)
中須 みえ (福岡市)
茅島 奈保代 (福岡市)
西 美穂 (福岡市)
迫田 京子 (粕屋町)
篠澤 真喜子 (宇美町)
阿部 靖子 (篠栗町)
小森 陽子 (小郡市)
佐藤 智重 (大刀洗町)
倉富 良子 (久留米市)
相良 幸子 (筑紫野市)
江田 和美 (八女市)
千々松まゆみ (柳川市)

【スタッフ】

江崎 永敏 (八女市)
野見山 圭 (嘉麻市)
中村 眞弓 (飯塚市)
原田 健二郎 (北九州市)

【事務局】

小林 泰志 (エフコープ)

2023年5月現在

敬称略・順不同

聞き書きによる被爆体験証言集 28 つたえてください あしたへ……

2023年6月発行

発行所 エフコープ生活協同組合 組合員活動部
〒811-2495 福岡県糟屋郡篠栗町中央1-8-3
TEL 092-947-9003 FAX 092-947-9192

編集・印刷 デザインルームえふで (DFD)

この証言集の発行費用はエフコープ組合員による
「平和活動募金」から拠出しました。



城山国民学校

1923年(大正12年)九州初のコンクリート3階建て校舎の城山尋常小学校として設立された。

昭和20年8月9日、爆心地に一番近い(約500m)国民学校であった当校は、原子爆弾により甚大な被害を受けた。当時、学校にいた教職員31人のうち28人と、当校に一部が疎開していた三菱兵器製作所の職員・学徒報国隊員等105人が死亡。被爆時は校舎内に児童はいなかったが、在籍児童1,400人(全校生徒の8割)が家庭または学校周辺で爆死したと推定されている。